家族造形法の深度

（1）

早樫　一男

「誰かやってみませんか？」
家族造形法との出会いはこの一言から始まりました。

最初の出会いは１９８８年です。「家族療法家のための研究会（企画：鈴木浩二先生　牧原浩先生）」主催の“家族療法ワークショップ”が国立精神保健・神経センターで開催され、その講師が「体験学派」として活躍中の Bunny Duhl だったのです。
しかし、参加を申し込んだ時点で、「家族造形法」「体験学派」「Bunny Duhl」等を知っていた訳ではありません。まったく理解していなかったというのが正直なところです。
同僚から案内文を見せられた時、「一人でもいいので、東京（正確には千葉県市川市ですが）に行ってみよう！」となぜか思ったことを覚えています。
実は、１９８５年の家族療法専門課程（京都国際社会福祉センター）との出会いも同じような感じでした。先輩であった団士郎氏からの誘いに、「やってみよう！」と思ったのがきっかけでした。巡り合わせというか、出会いって、本当に不思議なものだと改めて痛感しています。

その当時の案内文が今も手元にあるのですが、そこには講師の紹介として、以下のような記述があります。
『講師の Bunny Duhl は家族造形法、特に Boundary Sculupture の生みの親として知られ、その著「Interpersonal Vulnerability Contract」や「From the Inside Out」は　家族療法家の間で愛読されています。家族システムの様相を描き出し、それを建設的　な方向に変化させるベテランの治療者です。既に、家族造形法を臨床の場に応用して　いる方もかなりおられると思いますが、彼女の造形法にはバラティがあり、とてもユ　ニークで応用の範囲が極めて広く、システム療法だけでなく、個人の精神分析療法にも、またその訓練やスーパービジョンにも十分応用可能であると言われています。家　族と個人のシステムの診断と治療に必ずや役立つものと確信しておりいます。』

グループのメンバーに推されて手を挙げた私は、Bunny Duhl の絶妙なリードのもと、自分の育った家族を「家族造形」として作る（再現する）ことになったのです。彼女の素敵な人柄、衝撃的と言えるような体験と気づき、家族造形法のバリエーションの学びが、その後、現在に至るまで家

族造形法と付き合ってきた所以です。

彼女のファンになった私は、１９８８年以降開催された数度のワークショップに殆ど参加することになりました（ちなみに、京都国際社会福祉センターでもワークショップが開催されました）。

改めて、家族造形法を紹介すると以下のようにまとめられるかもしれません。

家族造形法（Family　Sculpture：家族彫像化技法とも言う）は１９６０年代後半に生まれ、Bunny Duhl、Peggy Papp、Virginia Satir　などによって広められた技法です。

その特徴としては、まず、治療的側面です。家族内の対人関係を、「いま、ここで」の面接空間といった場を利用して、家族が各々のからだを用いて、視覚的・具体的に示すことによって、相互認知を深め、感情を分かち合おうとするものであるということです。その結果、家族の変化へとつながるのです。

さらに、診断的側面も有しています。それは、家族内の相互作用の様相、家族員相互の親密さや距離、家族の権威構造、非言語的コミュニケーションのパターンなどが、可視的・感覚的・象徴的に家族全体の枠組み（システム）の中で理解できるからです。

ジェノグラムが主に事実中心から家族理解を深めるとすれば、家族造形法は感情や体験、あるいは“はっきりしないもの”を扱うことができると言えるかもしれません。

さて、前述の案内文にあるように『造形法にはバラティ』があるのですが、それはあまり知られていないと思っています。

また『応用の範囲が極めて広い』ものなので、私自身は実際の相談場面よりも、現在は「事例検討会」や「家族造形法を通した家族理解のための研修会」等で、定期的・不定期に活用しています。

まさに、『システム療法だけでなく、個人の精神分析療法にも、またその訓練やスーパービジョンにも十分応用可能』なのです。

さらには、団先生とともに、「援助者自身の自己覚知」のプログラムを実施してきましたが、その中でも「家族造形法」がベースになっています。

ところで、家族造形法の紹介は、例えば、「平木典子　中釜洋子共著　家族の心理」の中の一コマに「家族彫像化」の概略が記載されていますが、数少ないと思います。進め方（技法）は、「家族療法技法ハンドブック（星和書店）」の「第３章彫像化技法　家族ふりつけ技法」に紹介されています。「家族療法研究　第３巻第１号」には「家族療法への招待（３）」として、かなり丁寧に紹介されています。

しかし、『造形法のバラティ』については、知られていない（実践されていない？）ように思いますので、今回のマガジン企画の一つとして、「家族造形法」に焦点を絞り、これまでの経験を「家族造形法の深化・進化・真価」、そして「家族造形法の深度」としてまとめてみることにしました。

次回以降の内容としては（あくまでも予定ですが）、家族造形法の進め方の紹介、さまざまなバリエーションの紹介（時には Bunny　Duh から学んだバリエーションの紹介）を考えています。

家族造形法の特徴の一つは「視覚」であるだけに、「画像」を通した発信にチャレンジできればと思っているのですが…。思うようにいくかどうかは次回以降のお楽しみということで…。

いずれにせよ、執筆エントリーの底辺には、「この技法をそれぞれの対人援助現場で使ってみてもらいたい、いろいろなバリエーションを工夫してもらいたい」といった願いを込めています。

家族造形法は対人援助技法として、大変役立つものですので、お薦めですよ！

家族造形法の深度

（2）

早樫　一男

◆ はじめに…

家族造形法は家族との面接場面で生まれ、利用されている技法です。
そこで、今回は実際の家族との面接場面における具体的な進め方について紹介します。
なお、以下については、あくまでも一般的（基本的）な進め方です。

◆実施の要領

①彫刻家を選びます。
家族の中の誰か一人に彫刻家としての役割を担ってもらいます。

セラピスト（例）
『今日は新しいことをやってみたいと思います。みなさん、立って下さい（この時、セラピストも立つように）。＊＊さんは彫刻家の役割をお願いします』

※誰を彫刻家に選ぶかは、事前に検討しておくことが大切です（まずは、家族の葛藤の外側にいると思われるメンバーが無難かもしれません）。

②彫刻家がメンバー全員を粘土の塊に見立てて、自分のイメージする家族（日頃の様子や風景等）を作ります。

セラピスト（例）
『あなたがイメージしているような家族を作ってみてください』
『家族の印象的な場面（シーン）や風景を作ってみて下さい』
『いつもの家族の状況が分かるよう、普段の生活場面を再現してください』　等

※家族メンバーは“粘土の塊”ですので、「勝手に動かない、彫刻家役から指示された通りに動く、しゃべったり笑ったりしない」といったルールを伝えます。
※また、彫刻家役もできるだけ言葉を使わないようにして作っていくように伝えます。
※彫刻家役は家族を一人づつ選び、位置・姿勢・表情など、あわてずに、ゆっくり、丁寧に作っていきます（セラピストは彫刻家役をサポートします）。

セラピスト（例）
『視線はどの方向ですか？』
『手はどうですか？』
『この人はどのような表情ですか？』
『あなたが思っているイメージのようになりましたか？』
『これでいいですか？』
『どこか修正するところはありませんか？』

③彫刻家自身も家族（彫刻）の中に参加します。

セラピスト（例）
『あなた（彫刻家）自身も、彫刻の中に入ってポーズを作ってください』

④改めて、全員が静止します（一分間）。
　この間、からだや気持ちに集中します。

セラピスト（例）
『今から一分の間、みなさんは自分の体や心の動きに関心を向けてください。集中してください』
『それでは、スタートします』

※静止の時間は一分よりも長めでもよい。
※静止している間、セラピストはさまざまな角度から「家族造形」として、作品を鑑賞します。

★家族造形を作成するここまでのプロセスは、家族の理解やアセスメント（診断的側面）につながるものとなります。

⑤家族それぞれの気持ちや感じたことを言葉にします（セラピストが質問していきます）。
セラピスト（例）
『＊＊さん、からだの感じはどうですか？』
『どのような気持ちですか？』
『どのような感じが湧いてきますか？』
『どのようにしたいですか？』
『気になる存在はどうですか？』
『どのようなことが気になりますか？』
『どのような位置だったらいいですか？（ありたいですか？）』
『どのような姿勢だったらいいですか？（ありたいですか？）』
『どのような表情だったらいいですか？（ありたいですか？）』
『居心地はどうですか？』
『彫刻家があなた（家族）をこのようにイメージしていたというのは知っていましたか？』

※セラピストは、気持ちや感情に関連する言葉や思いを引き出すように心掛けます。

セラピスト（例）
『＊＊さんの感想を聞いて、どのように感じましたか？』
※家族メンバーの交流や理解が深まるような質問も工夫します。
※セラピストとしては、メンバーが自分の思いを率直にフィードバックするとともに、それぞれの発言やコメントを家族がお互いに確かめ合ったり、理解し合えるように進めていくことを大切にします。

※セラピストの感想を伝えることもできます。また、メンバーへの質問といった形で、介入的アプローチができる場合もあります。

★フィードバックと交流のプロセスは家族に新たな変化をもたらすといった意味で、家族へのアプローチ（援助・介入的側面）につながっているので、大変重要です。

★ここまでのプロセスが一つのセッションです。

◆バリエーションの紹介

　続いて行う場合、次回の面接で行う場合など、臨機応変、工夫次第でいろいろなバリエーションがあります。

○彫刻家を代えてみる。
→　家族お互いのイメージや違いが明らかになったり、違いを話題にして家族内のコミュニケーションが促進できます。
○動きをつける。
→　動きが加わることによって、感じ方が変わる場合や動きのきっかけが明らかになる場合など、家族のパターンがより鮮明になることがあります。
○理想的な関係を作る。
→　「このような家族であったら…」という造形を作ることによって、家族の目標を共有することができます。
→　また、目標に向かって、家族それぞれがどのように協力するかといった点について、意見交換、相互交流を深めていくことも可能となります。
○誰かのポジションに代わってみる。
→　役割交代によって、新たな気付きが生まれる機会をつくります。
○家族史を順に作っていく。

→　家族の歴史を家族とともに振り返ることによって、その時々の気持ちや感情に触れる（思い起こす）機会となります。

○その他

・メンバーが足りなければ、セラピストや協力スタッフを加えても構いません。

・椅子や座布団などの小道具の利用もＯＫです。

◆ おわりに

家族相談場面における家族造形法の具体的かつ一般的な進め方を紹介しました。

アセスメント・理解（診断的側面）とアプローチ（援助・介入的側面）の実際の紹介にもなったことと思います。

現在は相談の第一線からは離れていますので、事例検討の場で家族造形法を使っています。

事例検討での進め方や展開の仕方など、次回から紹介していきます。

【家族援助を目指す人のための研修会　２０１０】での一コマ

『三世代家族の食卓風景』

一分間の静止

それぞれの気持ちや思いを確かめているところ

（中央奥に向き合って座っている二人）

○祖父役（左）

○祖母役（右）

（中央奥の右　立っているのは…）

○事例提出者（彫刻家役）

（真ん中の向き合って座っている三人）

（左を向いている）のは

○娘役

横に並んでいる（背中が見える）のは…

○息子役（左）

○母親役（右）

（手前の男性）

○父親役

家族造形法を使った事例検討

家族造形法の深度
その３

早樫　一男

〇はじめに…。

これまで２回は家族造形法の基本の紹介でした。今回からは、「家族造形法を使った事例検討」を紹介することにします。

基本的な進め方はいたってシンプルです。事例提出者（以下、提出者）が彫刻家になります。それぞれの家族の役割は参加者の中から選びます。そして、提出者が彫刻家となって、面接で語られた家族を造形という形にして創りあげていくのです。

提出者にとっては家族全員を配置することによって、家族というシステムの中の個人について、視覚的に確かめることができることになります。

また、造形は家族の関係を具体的な位置や姿勢として表すことになります。提出者は家族を創りながら、家族の関係に気付くチャンスが与えられているといってもいいかもしれません。

さらに、家族一人ひとりの表情、視線、手の動き等も創っていきます。家族にとっては“からだ”を通して家族を感じることにつながる感覚的な体験にもなります。

造形が完成後、その感覚的な体験をそれぞれの声や言葉を通して確かめていくプロセスはとても興味深いものです。これまでなら、面接をしている特定の家族の語りを聴くだけであったのが、それぞれの立場に立っての語りを聴くことができ、新鮮な発見がたくさん生まれるのです。

もちろん、家族の役割を引き受けた参加者にとっても、家族のことを考えるとても不思議な時間・空間が創りあげられていくことになります。

家族造形法を使った事例検討は、ダイナミックであり、ライブ感覚であり、そして、ボデーワークのようでもあるといった、さまざまな要素を含んでいる事例検討法です。

ライブを紙面で再現することはなかなか難しいところですが、今回はある研究会での様子を紹介することにします。なお、事例に

ついては、一部修正・変更など、再構成してあることをお断りしておきます。

〇事例について…。

提出者が家族に関する情報や提出の意図を簡単に説明するところから始まりました。

提出者はホワイトボードにジェノグラムを作成しながら、母方祖父母、母、母の弟（おじ）、本人（姉）、弟の６人家族についての情報を簡単に語っていきます。

本人は１０代の中頃から身体症状を訴え、自宅から殆ど出たことがないまま家にいます。

「どうなったら本人が今よりも楽になったり、前向きになっていけるかについて、家族それぞれの思いも確認することによって、これからの援助に何かアドバイスというかヒントになるようなことが手に入ったらいいなあ」というのが提出者の思いです。

「正解はないが、参加者からのいろんなコメントやアイディアをもらいましょう」というファシリテーターの言葉によって、家族造形が始まりました。

〇家族を創っていく、置いていく…。

それぞれの役割を担う人が提出者によって指名されます。家族情報の捕捉が行われた上で、提出者が彫刻家役となり、一人ひとりのメンバーを粘土に見立てて、ゆっくりと創っていきます。一連のプロセスを見ているオブザーバー役もフィードバックの際には、重要な役割を果たすことになります。

最初に選んだのは本人（役）です。ゆっくりと部屋の真ん中に置きます、視線は下向きで、両手には力が入り、構えた姿勢です。

次に選んだのはお母さん（役）。娘の左横に座り、右手は娘の左腕の方に近づこうとしています。視線も本人の方を向いています。

三人目は弟（役）が選ばれました。母と姉に背を向け、家族の外を見ているといった感じの姿勢で座っています。提出者からは「楽な姿勢でいい」という指示が追加されました。

（写真解説）

左から本人、母、背を向けている弟

次に選ばれた祖母（役）は椅子に座って、本人と母の方を向いています。母の弟（役）は祖母の左後ろに膝をついた中腰となり、本人に向かって左手で指差しています。

最後に祖母の右後ろに隠れるように置かれたのは祖父（役）でした。

（写真解説）椅子に座っている祖母、祖母の後ろにおじ、祖母の右後ろに祖父、祖母の前には本人と母（右端）

（写真解説）　静止の時間　後方動いているのはオブザーバー

〇静止の時間…。

家族全員の造形が完成したら、しばらくの間、そのまま静止の時間をとります。この時間はそれぞれの胸の中に湧いてくる思いを確かめる貴重な時間なのです。

オブザーバーは、ギャラリーとして、彫刻全体をさまざまな角度から眺めたり、それぞれのメンバーに近いところに位置し追体験したりといった、自由な動きをしながら、家族について考えていく役割を担います。

それぞれの役割を演じている人がここで感じたり気づいたりすることやのコメントが、「here and now」で思いがけない展開となっていくのです。

〇それぞれの語りに耳を傾ける…。

静止の時間が終わった瞬間、本人が「泣けてくる」と涙を流し始めました。提出者も自ら創った造形を眺めて、感情が揺り動かされたようです。本人に引きつけられるように、寄り添う位置に動きました。

提出者は創った順番に合わせて、それぞれの語りに耳を傾けていきます。

まずは、本人の語りです。すぐに言葉にはなりません。しばらく、涙とともに沈黙。左横にいる母との間で感じることを語り始めました。身体を通して感じる複雑な感覚や思いなどです。次に、おじさんのアクションに対する思い、祖母に対する思いが語られました。その後、弟や祖父に対しての印象でした。最後に、家族の中にいる率直な感想が述べられました。

祖父に対するコメントを聞いた提出者は「ああそうなんですか…」と意外な様子です。

実は、提出者が予想もしていないコメントが新鮮な気づきや発見になるのが、造形法の興味深いところなのです。

（写真解説）　本人から見た風景の一部　祖母と隠れたような祖父

次は母のコメントを確かめます。母は息子や娘との距離感、祖父母に対する思い、そして家族の中での役割意識等を語りました。ちなみに、祖母は「菩薩のように見える」とのことでした。ファシリテーターは本人に母のコメントについての感想を求めました。

（写真解説）母から見た風景の一部　左から祖父　祖母　兄（本人のおじ）　娘

〇外から見た家族、内に入って感じた家族…。

オブザーバーに感想を尋ねてみました。

お母さんについてのコメントの後、オブザーバーは「家族を一人ずつ、造形として置いていくにつれて、場面が変わっていく感じがあった。おばあさんについては、母の菩薩という言葉にはすごくびっくりした。外から客観的に見ていると、ものすごく偉そうで、近い距離で統治して、ある種、規範的なまなざしで見ているのに、母のコメントは意外であった」

提出者は「最初は思わなかったのだけれど、すごく、うまく置けたかもしれない」との感想。オブザーバーは、その後、弟のポーズや祖父の楽なポジションについて、コメント。また、それぞれのメンバーの横に立って見た時やみんなの姿勢になった時の感想と、外から客観的に見た時の感想についても語りました。

オブザーバーは、造形のプロセスを外から客観的に見ることができます。一方で、静止の時間には、各家族の横に位置し、同型の姿勢をとって感じ取る主観的、感覚的な機能も触発されることがあるのです。

そして、この両者のスタンスからのコメントと家族のコメント、提出者のコメントとが混ざり合って、さらに、新たな発見が生まれていくところが、家族造形法を使った事例検討ならではなのです。

〇さらに、家族の語りに耳を傾けると…。

祖母が語ったのは、本人の表情を見ての感想、母に対しての思い、母と本人との姿勢からの感想、そして、自分自身の身体感覚などです。祖母の言葉に対して、本人やファシリテーターからのコメントが加わりました。

（写真解説）祖父から見た風景の一部　左から祖母（椅子）　本人、母、弟

（写真解説）祖母から見た風景の一部　母、本人　弟

興味深いコメントが出てくるに従い、随所で家族役による交流や提出者も交えた検討が自然に深まっていきます。それは、家族造形法を使った事例検討の面白さでもある。

次は弟です。彼は母の言葉を聞いての感想をまず語りました。ほとんど見えない姉、祖父母等への思いも語られました。最後は弟自身の思いや姿勢から感じることでした。

祖父、おじも他の家族への思いや自分自身のスタンスなどについて語っていきました。

（写真解説）　おじから見た風景の一部　おじは左手を前に本人、母の方向を指している

提出者が改めての感想を述べました。

「この中にいるだけでも本人はしんどそう。客観的に言えば、作り手としてはよく作れたと思う。みなさんのフィードバックはとても参考になりました」

（写真解説）フリートーキングの一こま　左から弟　母　祖父　本人（右端）弟と母の間にいるのはオブザーバー

〇その後は…。

改めて、各メンバーのフィードバック（追加）を確かめた後、後半は今後の援助の方向性について、フリートーキングが展開されましたが省略します。

最後に、役割解除の儀式を行い、ラスト一言を分かち合って、研究会は終了しました。参加者それぞれにとって、大変、印象に残ったケースのようでした。

〇改めて、提出者の感想です。

この研究会に参加させていただくようになり、何年にもなりますが、毎回新しい発見があります。これまでは、クライエント本人を取り巻く家族の状況や家族それぞれの思いを整理したい時、家族の力動が絡んでクライエント本人へのアプローチだけでは解決の糸口が見えない時、家族の転入・転出や変化があって家族力動がどうなっていくのかという見通しを得たい時に、ケースを提出し、メンバーの皆さんからヒントやアドバイスをいただいてきました。今回は、家族それぞれがしんどさを抱えている家庭で、クライエント本人が動き出したいけど動き出せないという状況の中、どのようなサポートがあれば本人が動き出せるのかというヒントが得たく、ケースを提出させていただきました。

家族を造形していくにあたり、本人を取り巻く家族システムを視覚的に捉えられるこ

とや、提出者自身が家族と同じ姿勢を取ってみることで、家族力動を体感することができました。「こんな姿勢をとっていたら、肩に力が入るだろうな…」「こんな距離感だったら、圧迫感があって動けないよな…」「意外と○○さんの位置からは、家族全員が見えているな」などの気づきと、役割を演じたメンバーからのフィードバックを重ねあわせ、本人と家族のしんどさを再確認したり、本人と家族のリソースが見えてきました。面接中にクライエント本人から得てきた家族の情報が、それまでは点と点だったのが、メンバーからのフィードバックにより線となり面となり、臨場感を伴った理解（＝共感）につながっていくような感覚でした。

また、カウンセラーとして自分はこの家族のどの位置に立っているのか、できあがった造形に自分を彫刻として加えてみることもできます。今回は本人役のフィードバックから感情が揺さぶられ、思わず私から本人に寄り添いましたが、これも私自身の今ある立ち位置と距離感を確認することになりました。今後の援助の方向性だけではなく、クライエントの家族システムに自分がどう加わっているかの確認にもなったと感じています。

何よりも今回の大きな収穫は、提出者自身が造形することにより、エンパワーされたことです。メンバーそれぞれが家族のしんどさを体とこころで感じ、訴え、共有すること、そしてこれからどうなっていったら援助の役に立つだろうかと、頭とこころを寄せて共に考えていただきました。メンバーの皆さんに、本人と家族の思いを共感していただいたことは、私自身の支援のパワーとなり、希望を持ちながら関わり続けていくことの大切さに気づかされました。本当にありがとうございました。

○おわりに…。

今回の掲載について協力いただいた事例提出者を始め、研究会のメンバーにお礼申し上げます。

家族造形法の深度

家族造形法を使った事例検討
その４

早樫　一男

〇はじめに…。

「家族造形法を使った事例検討」のバリエーションを紹介します。

基本的な進め方は前回紹介したとおりです（必要な方は、対人援助マガジン第２号や第３号の「家族造形法の深度」を参照下さい）。

前回同様、ライブを紙面で再現することはなかなか難しいところですが、以下は、ある研究会での様子です。

〇提出者の思いは…。

「特徴的な場面を再現することによって改めて確かめたいことがある」「気付かなかった面や新しい情報を手に入れることができれば」というのが、今回の事例提出者（以下、提出者）の思いです。

家族は両親（父親は４０代前半　母親は３０代後半）と長男（小学校高学年）、長女（小学校中学年）の４人です。父親は転勤族、長男は不登校、長女は兄に追従するようなかたちで不登校という状況です。

〇家族を造形していく…。

いつものように、家族役割を担うメンバーが提出者によって指名されました。

その後、家族それぞれの人柄や特徴についての補足説明（役割イメージを吹き込む）が行われました。

その後、提出者が彫刻家役となり、各メンバーを粘土に見立てて、ゆっくりと造形していきます。

提出者からは、「３つのシーン」を再現したいという要望があり、まずは、一つめのシーンを造形していくことになりました。

〇不登校の長男と母親を中心に…

母親が長男に向き合っています。母親の左手は下向き加減の長男の右肩に置かれています。妹は母親と兄の様子を座って眺めているという造形になりました。父親はこの３人からは遠くに置かれました。３人には背を向けて座り、まったく別のところを

見ています。

（写真１　解説）　長男に向き合っている母親　二人を見ている妹

（写真２　解説）　長男に向き合っている母親と二人を見ている妹　中央上に父親

〇静止の時間…。

家族全員の造形が完成後、改めて、しばらく静止の時間を作ります。いつものように、この時間はそれぞれの胸の中に湧いてくる思いを確かめる貴重な時間となります。

オブザーバーには、ギャラリーとして、彫刻全体をさまざまな角度から眺めたり、各メンバーに近いところに位置し、追体験するようにという指示が与えられました。さまざまな角度から、第三者として家族を観察します。一方、追体験に近い感覚を共有にしながら家族のことを考えていく役割も担います。

静止の後、各役割を演じているメンバーからのフィードバックです。時には、事例提出者やギャラリーのコメントが加わることにより、「here　and　now」で思いがけない展開となっていくこともあります。

〇それぞれの語りに耳を傾ける…。

提出者は創った順番に合わせて、それぞれのフィードバックに耳を傾けていきました。母親「お父さんは、向こう側に座っているだけで、遠い存在という感じがします。娘もわかるのだけれど、とりあえず、息子のことを何とかしないといけないというか、するのは私しかいないので、息子をなんとかしようという気持ちが殆どです。お父さんに助けて欲しいけれど、お父さんはあまりにも遠すぎて、呼べるような距離にまったくいない。私がとりあえず息子をなんとかしないと息子が可愛そうという気持ちでいっぱいです。」

（写真３　解説）母親から見た風景の一部

進行役「お父さんへの期待は？」

母親「期待というか、呼ぶにも呼べない距離にいる。殆ど見えないというか…。父親については、気持ち的に頼れない」

父との物理的距離、さらには心理的距離が言葉として表出されました。また、息子とは心理的に近いということも、改めて伺われました。

母親「息子には緊急性があって、息子からは眼を離せないという状態。とにかく、息子のことを何とかしないといけないという使命感がある。娘は見えるけれど、娘は安定した状態にあるので、まあいいかという気持ちです。」

次は長男に確かめます。

長男「ひたすら悲しいなあという気持ちです。お母さんしか味方がいない。お父さんは全然見えない。妹はかすかに見えるけれど、存在を感じているのはお母さんだけで、お母さんだけが味方で…。どうしよう、悲しいなという感じ。」

進行役「この場所や姿勢はどんな感じですか？」

長男「姿勢は窮屈といえば窮屈です。からだは固まった感じがあって、リラックスできている状態ではない。」

進行役「少しでも楽になるポーズや場所などはイメージできますか？」

長男「それはよくわからない。椅子に座っている方が楽かもしれないが…。」

進行役「お母さんが正面にきて、面と向かい合っているというのはどうですか？」

長男「安心感がある。窮屈ではない。肩に置かれている手も温かい感じがしてる。」

（写真４　解説）　長男から見た風景の一部

進行役「息子の話をきいて、どう思いますか？」

母親「私を頼ってくれるのはうれしい。余計に、私がしてあげないといけないという気持ちが強くなる。」

再度、母子二人のつながりの強さが明らかになりました。

次は、長女（妹）に確認です。

（写真５　解説）　妹から見た風景の一部

長女「お兄ちゃんが可愛そうと一瞬思ったが、段々腹が立ってきて、蹴っ飛ばしたくなるような感じ。ずるいという感じ。

お母さんがお兄ちゃんの方を向いているから、私としてはちょっと楽なこともあるが…。お母さんについては、あまり悪く思うような気持ちは、最初なくって、大変やなあと思っていたが、段々、お兄ちゃんはずるいと思ってからは、ちょっとお母さんにもむかついた気持ちが生まれてきて、何、甘やかしているのというような感じ。最後は、お兄ちゃんずるいという気持ちがはっきりしてきた。」

進行役「ずるいという気持ちは表現しますか？」

長女「それを出してしまうとまずいという感じがあり、本当は蹴っ飛ばしたいのだけれど、行動で表すとまずいという気持ちもあるから、我慢している。」

この後、提出者から兄妹間のエピソードが思わず語られました（省略）。

長女「不当に自分の持ち物を取られているような気がする。正々堂々と戦えよ！みたいな気持ちにもなる。」

進行役「長女の気持ちについて、お母さんはどの程度わかってくれていると感じていますか？」

長女「あんまり関心がないように感じている。」

進行役「お母さんに直接伝えたいことは？」

長女「お母さんはお兄ちゃんに全力投球という感じだから、“お母さんはもういいや”という気持ちで、むしろ、“お父さんは何をやっているのか”という気持ちがわいてきて、お父さんの方をちらっと見たくなる。」

進行役「お母さんには期待していないという感じなのですか？」

長女「この二人の間で完結しているから、お兄ちゃんのことを“ちょっと、甘やかしすぎではないか”と思うけど、お母さんはいらちやし、あっち向いていてくれているのは楽かな…」

進行役「ここの居心地は？」

長女「悪くはない。割と気楽な感じ。」

進行役「お父さんについてはどう？」

長女「お父さんは遠い。何をやっているかわからない。お父さんは私のことをかまってくれてもいいんじゃないかと感じている。」

最後に、お父さんです。

（写真６　解説）　父親の周辺の風景の一部

父親「とにかく、仕事が忙しい。息子はいじめられて大変というのは知っているし、どうにかしたいという思いもあるが、仕事があるからいけない。妻に任せている後ろめたさはある。罪悪感もあるが、一方で、暗黙に責められていると感じている。」

進行役「責められているという感じが伝わってきているのですか？それとも責めら

れているのではないかと感じているのですか？」

父親「そこにいないからこそ、そう思っている。」

○外から見た家族、内に入って感じた家族…。

ギャラリーからのコメントです。

Ａさん「父親の側に近づいてみたたが、特に印象に残らなかった。仕事に行って、そっちに熱中している。今になって考えると、後ろめたさもあったのかなあと思うけれど、ぱっと見た感じでは、父親は仕事の方に逃げているという感じで、家庭は母親に任せっきりで、仕事オンリーやったかなあ。母と息子の二人で完結している。」

ギャラリーは、造形のプロセスを外から客観的に見ることができます。一方で、静止の時間には、各家族の横に位置し、同型の姿勢をとって感じ取ることにより、主観的、感覚的にも触発されることがあります。

○２つめのステージ

提出者は３つのステージを展開したいということですので、２つめのステージの造形を作ることになりました。

造形法の面白いところは、さまざまな場面を創り出せるところです。その場で感じたことをきっかけに、違った場面を創ることも可能なら、今回のように、あらかじめイメージした場面を創ってみるということもできます。

いずれにしても、造形のプロセスとその後のフィードバックが興味深いものとなります。

お母さんは横になって、ビール瓶を持って、くだを巻いているところです。「おまえがしっかりしないからだ！」と一人でうなっています。子どもたちは部屋で耳をふさいで座っています。

（写真７　解説）　くだを巻いている母親と子どもたち　後ろはギャラリー

（写真８　解説）　別の部屋で耳をふさいでいる子どもたち

お父さんは、マンションのドアを開けて、帰宅したところです。惨状を唖然として見ているという感じです。

〇動きをつけることによって、気持ちの変化を確かめる。

静止した状態の造形を通して感じることをフィードバックすることによって、さまざまな発見が生まれますが、時には、動きをつけことによって触発される気持ちや身体の感覚に注意や関心を払ったり、確かめ合うということも可能です。

二つめのステージの配置が決まったところで、一つめのステージ（写真１～６）の位置から、ゆっくりと二つめのステージに動いてみることにしました。そして、その間の気持ちに集中し、その次に、二つめのステージの造形でしばらく静止し、その感じを味わうことにしました。

さらに、同じ動きをもう一度繰り返すことによって、動きを伴う中での気持ちをじっくりと味わうようにという指示が与えられました。

父親「仕事が終わり、遅い時間に帰宅。後ろめたさも抱きながらの帰宅なので、気分は重い。ドアを開けた瞬間、妻の姿が目に入ったが、自分の保身と誰かが悪いという考えが浮かんだ。」

父親の言葉を聞いて、提出者は「なるほどなあ」と一言。

長女「お母さんが暴れ出す前は、“お兄ちゃんずるい”とお兄ちゃんを蹴飛ばしたい気持ちだったが、お母さんが暴れ始めたら、“何だよこれは！”とひたすら思って、こっちに逃げてきたお兄ちゃんとひたすら目を閉じていたら、さっきよりお兄ちゃんのことは近しく感じられて、一人でいるという感じは薄まった」

ここでは、兄妹二人のつながりに関する気持ちが語られました。

（写真９　解説）　耳をふさいでいる長女

進行役「兄とは、妙に連帯しているという感じ？」

長女「子ども同士が同じところに押し込められたという感じがしました。」

進行役「お父さんに対しては何か思いますか？」

長女「お父さんには期待もしていないし、お父さんが何をしてくれるかあまりよくわからない感じがする。できれば、お母さんをなだめてくれたらいいとは思った。」

進行役「この場を収めるとか、お母さんをなだめるとかといった期待は少しはある？」

長女「できれば…」

長男「お母さんだけが頼りという感じだったのに、急に暴れ出すので、これは怖いと思った。逃げ出さなければと思った。

確かに、妹とは連帯感がある。お母さんに対しての仲間という感じになった。お父さんのことは何も考えていない。あえて言えば、早く帰ってきて…。」

（写真１０　解説）　耳をふさいでいる長男

母親「一生懸命、息子のことに対応しているのに、一向に成果がなく、お酒を飲まずにはいられない。飲んだら、痛快な感じがして、主人が帰ってきたのはわかったけれど、“ざまあみろ”という感じが強い。お酒を飲んだら気持ちが吹っ切れる。とりあえず、飲まないと私の精神が壊れてしまう。だから、飲まずにはいられない。」

（写真１１　解説）　くだを巻いている母親と耳をふさいでいる子ども　後ろはギャラリー

Ｂさん「お母さんが、突然、ぐれたと思った。父親に対する、ざまあみろといった思いは意外だった。」

母親「このイライラを止めるにはアルコールしかない。アルコールがなかったら、私の方がどうかなりそうという感じ。飲んでいる間は、子どもに暴力を振るっているという意識はなく、私の気持ちは楽。」

進行役「子どもたちのことは？」

母親「飲んでいるときは、全然、頭の中に入っていない。子どもが怖がっているといったことは全然意識にない。私にとって、アルコールは切るに切れないものです。私からアルコールを取ったらいられない。絶対、離せない。」

進行役「旦那さんは離せるの？離れているのか？」

母親「助けをよんでも、いざという時にはいつもいない。旦那に私の姿を見せつけたというような気分もある。」

〇提出者を交えての意見交換

提出者「それぞれが語った内容は、これま

での面接で語られたことと殆ど重なっており、細部まで伝えた訳ではないのに、不思議な感じです。一番驚いたのは、妻の夫に対する“ざまあみろ”という発言でした。確かに、よくわかるなあと思いました。直接、言語として表現した訳ではありませんが、そういう気持ちはあるのだろうなあと改めて感じました。妻の“ざまあみろ”という発言を聞いて、夫はどのように感じたのか聞いてみたくなった。」

父親「腹が立ちます。」

提出者「夫はこのような場面に出くわした後、見て見ぬふりをして、お風呂に入って、知らん顔をして寝ます。妻のことは手がつけられないのです。」

進行役「お父さんの言った“腹が立つ”というのは、自己保身の思いとどこかでつながっていますか？」

父親「私に対するあてつけ、何も出来ないだろうというように突きつけられている感がある。子どものことについて、何かしないといけないと思っているけれど、一方で、時間のせいにしたり、仕事のためという言い訳で引き延ばしてきている。しかし、より現実的な場面に出くわすと、自分は悪くないという思いが先に出て、現実を認めきれない。」

進行役「こういった場面が、例えば１回だけとか、たまたまやったら、許せるのだろうか？」

父親「１回目の場面だったら、もともと妻はかんしゃく持ちなので、許せると思う。毎日になると、スルーしてしまう。」

○３つめのステージ

場面が変わります。長男の担任が家庭訪問をしている場面です（写真１２）。担任は非常に若い先生です。母親の攻撃的言動に誘発されて、父親も加勢するという状況です。子どもたちは別の部屋で両親と担任とのやりとりや雰囲気は感じていますという指示が出されましたが、この場面には登場しません。

（写真１２　解説）　担任を追求している両親

先生「うつむいていたら、つま先しか見えず、顔を上げたいのだけれど、できない。うつ向いている方が楽な感じもある。顔を上げて何か言った方がいいのか迷っている。でも、とりあえず、うつ向いていようかなあという感じですね。」

母親「指を指していると、段々腹が立ってきて、息子があれだけ苦しんでいるのに、この担任の先生は、息子をいじめている子どもに対してちゃんと指導してくれないから、いつも状態が悪いままで、いつになっても学校に行けない。だいたい、この先生が頼りないからと思うと、段々段々腹が立ってきて、息子が学校にいけない全責任はこの先生にあるのではない

かというような気持ちになってくる。この先生に言っても期待できないというか、信頼できていないので、これだけ言うてもわからんか！という感じもある。」

父親「妻は怒っているし、同じようにやっておかないと、後で何を言われるかわからないので、同じようにやっている感じがありました。後は、悪者として、家族ではない誰かをに決めたがっていたので、“先生だ！”ということで、指が差せているところがありました。」

進行役「夫が横にいて、同じようなポーズをしていることについてはどうですか？」

母親「二人で連帯し、共同でやっているという感じがします。一緒に攻撃しているので、心強いです。」

ここでは、先生に対して、両親が連帯して向かっているというのが明らかになりました。

進行役「母親が心強く思っていると言うことは、父親にとってはねらい通りやね。」

提出者「確かに、夫は妻が怒りますのでという言葉をよく使っています。改めて、子どもに聴いてみたい。」

長男「ホッとしたというか、先生は怒られていて当たり前だという感じがした。先生が悪いと思っているから、親が先生を怒っているのは悪くない。」

長女「先生のことはあまり考えていなくて、“いいぞ！やれやれ！”という感じ。さっき、お母さんにはむかついて、お父さんにはがっかりしていたので、やっと二人で、並んで、同じことをしているのがうれしい。初めて、お父さんのことを見直せる感じがして、“頑張れ”って思いながら、喜んで見ている。」

進行役「子どもたちにとっては、悪くない場面ということやね。ところで、親は子どもたちがこの場面を見ているとか、雰囲気を感じているとか、いったような意識はあるの？」

母親「同じ家の中だから、子どもが聴いていると思うけれど、先生に向かっているときは、半分以上、子どものことは頭から飛んでいます。私は、とにかくこの先生に言わないと気が済まない。子どもがどう聴いているかといったことへの関心はない。」

父親「私は思いっきり意識しています。」

進行役「妻と同一歩調で揃えようということを意識してるんやね」

Ａさん「両親は共同作業できている。先生のお陰というか、先生がいるからできるんやなと思って見ていた。」

Ｂさん「お父さんは保身やというのをやっぱり思った。確かに、夫婦間の葛藤を丸く収めるにはいい方法かもしれないが、今さえよければいいという対応をしているという印象を強く受けた。」

提出者「システムとして面白かったのは、対学校、対教師という形をとって、夫婦が連合する。その中で、バーンアウトしていく教師が大変多いなあという図が典型的によく見えたのでとても面白かったです。」

進行役「先生にとってはたまらないけれど、家族にとっては、それでバランスをとっている。」

（その後、提出者は事例の簡単な紹介を行い、今後に向けてのフリートーキングが続きましたが、そこは省略します。）

〇改めて、提出者の感想です。

３つのシーンを組み立て、それぞれのシーンの家族の気持ちを追いかけるということができるのは、家族造形法の大きな魅力である。

まるで催眠術にでもかかったように、造形で得られたセリフと実際の面接で得られるセリフは怖いほど一致する。しかし、一致するのを驚き、喜ぶのが造形法の目的ではない。

今回の造形法で、一番のポイントは母親の夫に対する「ざまぁみろ！」という気持ちであった。その後の面接で、母親に「お酒を飲んでる時に、夫に対して、“ちょっとざまぁみろ！”って感じはありますか？」と尋ねると、少し考えて「確かにあるかも！」と答えていた。

さて、ここからの問題は、援助者がどのように造形法で得られたひらめきを今後のセラピーに生かして行くのかである。事実を造形法で当てるだけでは、占いと変わらない。

今回は時間の都合で、今後どうすれば良いのかまでのまとめは出来なかったが、十分な発想とひらめきは得られた。事実、この造形法の後、母親の夫に対する「ざまぁみろ！」という思いを軸に面接を続け、２ケ月後、長男は登校に至っている。

今回のケースで、あらためて造形法の奥の深さと、家族療法においてジェノグラムと造形法がいかに役に立つのかを学ぶことができた。

〇おわりに…。

今回は、いくつかの場面を造形してみるという展開を紹介しました。３つの場面、それぞれの風景と気持ちが表出されて興味深いものとなりました。

この家族は、常に、二人がつながっていないと不安定な家族なのかもしれません。

ところで、一つめの場面から二つめの場面に移る際には、動きをつけてみるというバリエーションも加えてみました。静止した状態で気持ちを確かめてみる、気持ちに集中してみるということができるのが造形法の特徴の一つであれば、動きを伴う中で気持ちに集中してみるということも可能です。その際には、何度か繰り返してみたり、動きのテンポを変えてみたりといったバリエーションを加えることがあります。

機会があれば、改めて、動きを伴った造形法の展開も紹介したいと思います。

今回の掲載について協力いただいた事例提出者を始め、研究会のメンバーにお礼申し上げます。

家族造形法の深度

家族造形法を使った事例検討
その５

早樫　一男

〇はじめに…。

繰り返しになりますが、家族造形法を使った事例検討の面白さは、ライブ感覚で、臨場感あふれた展開となるところです。面接にも通じる感覚といってよいと思います。

ライブの様子を紙面で再現し、伝えるのはなかなか難しいのですが、今回もある研究会での展開を報告することにします。

今回の事例検討の後半では、援助者の位置どりについて、体験的（体感的）な理解をすることになりました。

〇家族情報と相談に至る経過…。

家族は父母（いずれも４０代）、長男（中２）、長女（小４）です。父親は単身赴任ですが、自宅には週末ごとに帰っています。母親は福祉関係の仕事に就き、夜の８時過ぎに帰宅することが多いとのことです。長女（以下、本人）は勉強ができないので、夜中の１～２時ころまで勉強をしています。母親が買ってきたドリルをしなければいけないとのことです。長男はマイペースです。

相談は学校の先生から持ち込まれました。「いったいこの家族ってどんなの？」ということを考えてみることができたらなあというのが事例提出者（以下、提出者）の思いです。

〇家族造形を通して、家族の理解…。

提出者が家族役割を決めることからスタートです。役割が決まったら、提出者が彫刻家役になり、できるだけゆっくり、家族を作っていきます。

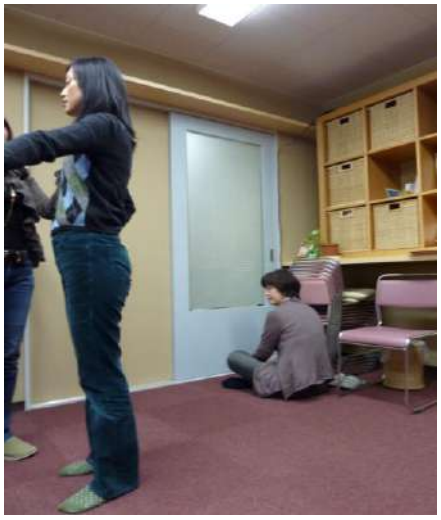
まずは、本人を置くことから始まりました。

本人はお勉強をしているポーズです。少しうつむいています。「一切笑わず、表情は暗い」という指示が加わりました。

次は兄です。本人からは背を向けて座り、一人でゲームをしている感じです。

その次は母親。娘をじっと見ています。関心は外にあるかもしれないということで、からだの向きをどのようにするか、提出者は悩みながら、ポーズや向きを作りました。

父親は隅っこで外を向き、あぐらを組んでいます。「家のことについては、少しは見ている感じ」というコメントが付け足されました。



（写真　１　座っているのは父親役　立っているのは母親役）

〇静止の時間…。

４人家族が作られた後、全体を俯瞰して、それぞれのポーズについての微修正が行われました。

完成後の１～２分程度は静止の時間となります（「どのような感じか湧いてくるか、どんな気持ちになるか等、じっくりと確かめてください」と指示があります）。

また、この静止の時間中、提出者はいろいろな角度から眺めたり、それぞれの横に位置し、共に感じてみることを繰り返していきます。

〇家族からのフィードバックと意見交換。

家族役割を引き受けた各メンバーからのコメントと意見交換は家族の理解につながる大切な時間となります。家族造形法ならではの事例検討の時間と言えるでしょう。

今回も提出者を交えた意見交換が活発になされました。以下、そのやりとりの再現です。

本人：苦しい。本当に苦しかった。息ができない。勉強をやめたらお母さんの足がつかつかとよってきそうだから、やめられない。しんどい。苦しい、この姿勢。本当に限界。

（写真２　本人役　右上にかすかに母役の足が見える　中央上は彫刻家役）

兄：まったくマイペース。家族のことをあてにしていない。自分から関わりを持とうという感じはない。誰も見えないし、あてにしていない。さみしいという感じはない。あきらめているわけではないが…。時々、飽きた時に、お母さんが怒っ

ている姿勢が見えたり、気配を感じると、また、お母さんは妹に対してやっているなあと思う。でも、いつもの感じやなあということで、距離を置いている。

（写真３　兄役　ゲームをやっているところ）

提出者：妹に対してはどんな感じ？

兄：特に、気持ちは湧いてこない。妹は見えないから、しんどいという声を聞いても、そうやったのかという感想しか浮かんでこない。

父親：娘は見えない。しかし、お母さんの足の向こうに娘の手は見える。娘はしんどいやろうなあとは思う。お母さんがしっかりと立っていて、足の存在がすごく強烈なイメージがあり、気になる。足が怖い。息子は単にいるなあという感じ。

本人：お父さんは気にしてくれているんや。

（父の言葉は意外という感想が語られました）

母親：いろんな気持ちの変化がある。すごく動いた。最初、指を指しているというポーズは、手がしんどくなるという感じと気持ちいい感じがした。自分がこの家を仕切っているというか…、支配という感じ。でも、静止の時間が経つにつれしんどくなってきた。最初は、子ども二人を目の端で見張るような感じだったけれど、最後の方は姿勢を維持するので精いっぱい。とにかく、しんどかった。自分のしんどさで気持ちは動かないが、子どもから声があがるとか、動きがあったら、カッとなって、しんどさが怒りに転じるような感じがある。父親は見えていない、気配しか感じない。でも父親の声が聞こえたり、動きがあると反応しそう。「何もしない癖に何言っているの！」とか、「もっと父親が頑張ったら」とか、「もっとしてよ！」といった感じでの怒りがある。まったく、見えないのに意識はしている。兄のコメントを聞いても心は動かなかった。娘がしんどいといった時にはイラッとする。娘の反応は刺激となる。みんなから、お母さんは怖い怖いといわれているときに意外だった。そんなに怖いって？いう感じ。

提出者：客観的に見ていると、お母さんが怖いっていう印象が強烈にある。自分で母親のポーズを作ったが、そのポーズが焼き付いて、どの家族メンバーの位置に行っても、お母さんは視野には入らないのだけれど、母親のポーズをずっと感じてしまっている。お母さんがとにかく怖くて…。

本人：私はお母さんの全てが見えないのだけれど、足が十分に怖かった。

提出者：私は残像のように残っている。自分が作っているかもしれないが、どこにいっても焼き付いている、離れない。

兄：僕は後ろを向きたくなかった。その一方で、僕のことをお母さんはどのように思っているのかは聞きたかった。僕の存

在について…。

母親：お兄ちゃんに対しては、変なことをしなければいいという感じ。でも、反抗期に入るし、口答えしたりしたらすごく反応すると思う。

提出者：兄としては、今は妹に目が行っているから、お母さんに対しては、あたりさわらずで、自分の世界を守るという感じではないかなあ。

兄：とりあえず、お母さんはどうでもいいはという感じ。お母さんとは適当に離れておこうというか…、向きたくないなあという感じがある。

本人：誰もあてにできない感じがあるから、誰か助けて！という思いが湧いても、誰もここにはない感じ。

父親：子どものことは気にはなるけれど…。

本人：途中で、横に倒れたくなった。窒息しそうで…。

〇母親への対応は？…。

提出者：お母さんはどういう名目なら、学校（スクールカウンセラー）に相談に行けるだろうか？

母親：警戒心はすごく強い。しかし、警戒心がとけて来たら、すごく頼ると思う。

進行役：お母さんは誰か（援助者）が自分の近くに来るということは受け入れることができるか？

母親：最初は警戒心が強いと思うが…。求めている気持ちはすごくあると思う。

提出者：お母さんはどういう名目だったら援助者とつながれるだろうか？子どもに問題があると言ったら、子どもにすべて裏目に出てしまう。お母さんに問題があるから相談をというわけにはいかないし…。

母親：先生から「学校で心配なことがある。お母さんにも聞きたい」と働きかけられたらどうだろうかと自問してみると…。

提出者：先生からお母さんに声をかけてもらうことはできるが、子どもの状況がスムーズにいっていないということは伝えざるをえない。

進行役：もしも、学校から「家でのお子さんの様子を聞きたい」と言われたらどうだろうか？

母親：娘に、「何をしたの？」って聞くだろう。

提出者：もしも、カウンセラーにつなげることができても、母親はほとんど心を開かないような気もする。

母親：自分からは行こうとは思わない。単発とか、２～３回ぐらいだけ会っても心を開きそうではない。でも、継続的に会ってもらいたい感じはある。誰かが近くに来てくれて、ちやほやちやほやしてくれたら…。べったりと頼りたい。

〇娘が元気になるには…

父親：学校から来て貰いたいと言われたら、行ってみようというつもりはある。

母親：私はうれしくない。特に、父親一人で出かけたら…。

父親：気になるから週末には帰っている。子どもに対しての気持ちはある。しかし、妻の足が気になる…。自分がいないところでお母さんがやっていることについて、信頼とまでは言えないが、尊重はしている。

進行役：両親で学校に呼ばれたら…。

母親：学校から帰ったら、学校ではこうい

う顔をするのと父親を攻撃しそう。
父親：学校から呼んでくれるのなら、行ける。

提出者：それでは、この子が元気になったらどうか？
母親：楽になる感じがある。
本人：この姿勢をやめさせてくれないかなあ。
母親：それがまた腹が立つ。「しんきくさい！」という感じ。自分と重なる感じがある。
提出者：そうだと思う。
母親：しんきくさいのを見ていると、すごくイライラする。
父親：娘とお母さんとの間での悪循環を感じる。
母：例えば、学校から「子どもを早く寝かせてください」と言われたら、どのように反応するかを考えている。自分の気持ちの動きが予測できない。「提出物が出ていない」といわれると、カッとなる。すごく腹が立つが、「早く寝させて」と言われるとわからなくなる。悪い反応は出てこないと思う。
進行役：夜の時間の過ごし方を聞かれたらどうか？
母親：何時ころ寝ているかと聞かれたら、責められている感じがする。子どもが元気になったら、お母さんとしては安心する。とにかく、子どもを見ているとイライラする。
提出者：救いは友達との関係には問題がないこと。それなりに楽しくやっているよう。
母親：そういうことを言われると母親としてはうれしいかもしれない。「学校で友達とうまくやっている」と言われるとうれしい。娘のことを褒められると、心の底のあたたかいところが動く感じがする。それを聞くとポーズが緩む。
父親：娘に対しては、気になるが手をのばせない間隔がある。
娘：父親からはそんな感じは伝わってこない。
提出者：でも父が帰って来ている。
父親：とにかく気になる。兄に対しては、そのままおとなしくしていてくれよという感じ。
母親：母親は実はすごく疲れていると思う。仕事はちゃんとしているかもしれないが、乖離していると思う。
進行役：母親は子どもに対して褒めることができないか？
母親：だって、しんきくさいもの…。イライラする元だもの。でも、褒めてもらうと心の底が温かくなる。お母さんを褒めるより、娘のことを褒められる方が温かくなる。実は、娘と一心同体という感じ、分身というか…。

提出者：改めて、確かめるが、担任と新しい関係、いい関係を作ってもらうことは…。
母親：このお母さんと継続的にカウンセリングしていく、サポートしていく覚悟がよっぽどしっかりしていかないと…。
提出者：学校として、そこまでの覚悟は体制的にも無理だと思う。お母さんが自主的にどこか相談機関に通うとも思えない（母親「通わないと思う」とつぶやく）。少なくとも、お母さんとコミュニケーシ

ョンをとれるようにして、この子の力をつけていく方向を考えざるをえない。お父さんには、このような状況の中で大変だから、助けてもらえませんかねといったふうに持っていけたらいいね。

母親：娘が思春期に入ったら、母娘の関係は大変だと思うけれど、小学校時代に少し明るくなって、元気になって、学校で褒められたら、大丈夫な気がする。

本人：これ以外のポーズでおいて欲しい。

提出者：この子に対しては、学校のサポートが少しでてきている。サポートが増えたことで、どのようなポーズになれるかだよね。

進行役：それをやってみたら…

提出者：今は、この子のことを保健室が把握して、保健の先生が声をかけてくれるようになった。この子はしんどい時は、保健室に行くようになった。また、いつも先生から怒られてきたのが、少し減ってきている。何か背景がありそうだとわかって、先生が配慮してきている。気にかけて、この子に声かけしてくれている先生もいる。それだけでも、この子にとってはだいぶ違うと思う。これから、この姿勢がどんなふうに替わるかやね。

進行役：具体的に先生役にどこかに入ってもらうかを考えてみよう。そのことによって、ポーズが変わるかどうかだが…。

この後、援助者の位置（関わり方を具体的に位置関係で表してみる）を確かめてみることにしました。

今後の関わりについて、造形という形で確かめてみるという展開は、造形法の使い方（バリエーション）の一つです。

家族造形法の面白いのは、その場で浮かんだアイディアを実際にやってみることができるというところです。

○援助者の位置は…。

最初のポーズの確認後、提出者が援助者役になり、「どこに、どのような姿勢で入るか」を試行錯誤して確かめてみました。

提出者：難しいなあ（思案する）…。

本人に関わる位置をいくつか確認しながら、その都度、援助者・本人・母親の感じを言語化していきました。

提出者：どこに入っても、お母さんからにらまれている

（写真４　立っているのは母親役　下を向いているのは本人役　位置を確かめている援助者役：左端）

母親：その位置はますますいやだ。

本人：どうしても動けない。

提出者：お母さんからみたらじゃまだよね。

（写真５　母親役から見た娘役と援助者役）

提出者：どっちから支えても、お母さんとは対立するね。

母親：学校で本人を支えるというのがいいのかもしれない。

提出者：お母さんにとっては見えないところがいいのかもしれない（他のメンバーも同意）。どこに入っても、お母さんの味方をしているというふうにはならないし、対立関係になってしまう。

母親：学校の先生が耳元で「頑張ってますよ」「友達とこんなふうにしてますよ」と言ってくれると受け入れられる気がする。

その後も、母娘が少しでも楽になる位置関係、ポーズの確認を繰り返しました。

提出者：当面、学校でサポートして、この子がしっかりしてきた頃に母親と会う場を設定するとかやね。

母親：そうだったらスムーズに受け入れられるかもしれない。

本人：援助者が横に来てくれると、神様みたい…。

提出者：この子にとっては、保健室で話をして、なんとなく楽になったことによって、希望を持ったのではないか…。

母親：登校というのは、お母さんの視界から消えてしまうようなイメージがある。帰ってきた時に、娘が元気になって、顔が上がっていたら、「あれっ、どうしたの？」という感じがある。その頃に、「最近、学校ではこうなんですよ」と言われたら、納得する。

本人：少し元気が出て、顔が上がった時には、お母さんの足がそんなに怖くない。

（写真６　顔を上げた娘役　手は援助者役　足は母親役）

その後、提出者からは学校の取り組み、今後の可能性についての話が展開されました。

〇事例提出者の感想

本人であれ、親であれ、自主的に相談に来ないようなケースのなかに、「まったく信じられない」「どういうことだろう!?」

と戸惑うものがあります。そんなとき、家族造形を置き、登場人物たちの声を聴くことで（文字通りの声もあれば、身体から感じられる声なき声もあります）、当事者中心の状況把握が可能になります。もちろん、本当の当事者の声ではありませんが、それでも、私たちのイマジネーションを活性化し、理解を深めてくれます。家族造形の優れたところは、登場人物のすべてが平等に声を上げ、それぞれの立場に寄り添った理解と支援計画が可能になることです。もちろん、最終的には、IP の利益が最優先されなければなりませんが、一見、悪者のように思える人にも理解と共感がなければ、家族を動かすことはできないのだと思います。

〇おわりに…。

家族役は、役割を引き受け、造形として感じ、演じる中から湧き出てくる思い（内なる声）とともに、役割から離れたところで感じる思い（外からの声）を行き来するというのが、家族造形法を通した事例検討の特徴の一つだと感じています。

今回も協力していただいた参加者のみなさんに改めて感謝いたします。

家族造形法の深度

家族造形法を使った事例検討　その６

早樫 一男

〇はじめに…

私自身が進行役を務めている家族造形法を使った事例検討としては、定期的な研修会（ふるかわ家族カウンセリング研究所主催　月１回　京都キャンパスプラザ）と不定期な研修（女性ライフサイクル研究所）があります。

今回は、女性ライフサイクル研究所で行われた研修後に実施した、当日の参加者による座談会の様子を報告します。題して、「家族造形法の面白さと難しさ、あれこれ」です。参加者の構成はＡさん、Ｂさん、Ｃさん、Ｄさん、今回が初めての人から数回という参加状況です。Ｅさん、Ｆさん、Ｇさんはここでの研修が始まった頃から参加しているベテランです。そして、私が加わっています。

「家族造形法の面白さと難しさ」について、あれこれと思ったことを自由に語ってもらいました。

〇家族造形法の体験は…

Ａ「クライアント役になってみると湧き上がってくる感情というものがある。頭で考えていたことと、実際にからだで感じることが違うという新鮮な体験をした」

Ｂ「初めてですが、自分というスタンスから見たときに、家族がどういうふうに見えるのかということを立体的にとらえられると思った」

Ｇ「研修なんかで使う時があって、その時には、２０人に一人ぐらいの割合で、さっぱりわからんという人がある。最初から、すべての人がすごくわかるというわけではないが、一方で、抵抗する人があるのも事実。こんなのは、勝手にその人が作っただけだという感じで、反発したり批判をしたりする。頭で考えるタイプの人は、なんか脅かされる感じがあるのか…。しかし、何回か体験してみると、じわーっと入っていく人もあるのだが…」

Ｂ「例えば、家族４人をどのように配置するのかがすごく重要になってくるのではないか」

Ｇ「その時に、批判的な人は彫刻家役が勝手に配置しただけだというのだけれど、そんなことを言ったら、文字情報のケースレポートも主観だ。それよりも、彫刻家役（援助者）がキャッチしている情報が視覚的に置かれることで、文字情報で選んだよりかは、情報が多いかもしれな

いとも言えるが、ある種の抵抗を感じる人がある」

C「自分が彫刻として置かれて感じることがあるのですが、それが、実際の家族の人とまったく同じではないとも感じる。しかし、一方で、家族役のフィードバックをきいて、実際の家族と重ね合わせることができるのは、提出者かなあとも思う」

G「家族の実際の感じと重なるかどうかというよりも、家族造形法というツールを使って事例検討をこの場所でやったことによって、援助者が新たに見えてくるものがあるということが大きい。これまで、ＤＶケースの事例検討等にも使っているが、実は、援助者がケース理解を深めるといった意味において、援助者自身のトレーニングの側面もあるのではないかと感じている」

C「それぞれのコメントは、可能性の一つとして受け止めるということですね。絶対視はできないということですね」

G「家族造形法を使っての事例検討をチームで実施することによって、援助者自身の理解が深まることが大切。その場で話し合った通りにいかなくても、いろんな視点で検討したことが次にいきる」

早樫「検討するときに、これまでのペーパー中心と違うところは、立体的、視覚的であること。これは、他の検討の仕方とは決定的に違う。ただし、提出者のイメージで作っている。各メンバーからのフィードバックについては正解を求めているのではなく、どんなふうに感じますか？ということをきいている」

C「むしろ、言語化されたケース報告を見るとイメージが湧かないことがある。臨床像が描かれているが、どんな人？っていうのが浮かんでこない、意味がわからないというのが結構ある。しかし、造形法という形にすると、こういう関係の中のこういう位置なのか、こういう感じのこの人ねというのがわかるから、造形法は結構いいなあと思う。理解が深まると思う」

〇役に入る…

早樫「いつも、造形法の終わりには、それぞれ引き受けていた役を降りる、自分自身に戻るという意味で、簡単な役割解除を行っています。具体的には、それぞれ引き受けていた役割に合わせたコスチューム（衣装、上着）を脱ぐということをイメージしてもらっていますが、そのことについては…」

D「さっき、服を脱ぐという話があったが、前回は服が何を意味しているかがあまりよくわからなかった。家族造形法だけでなくて、クライアント像を作ることで、自分の視点も、距離を持って考えられるという経験もした。言葉によらないというのがすごいなあと思った。一番最初に身体的なイメージがきて、そこから、キャラができていく感じがした」

早樫「さきほどの抵抗にもどるが、役に入るというのは、難しく感じますか？」

G「全然感じなかった。いつも、造形に入る前のケースの簡単な紹介の際、最初はそんなこと信じられないという感じがあっても、そこに置かれると不思議とわかる、感じる。頭で考えると、なんってい

う人だ！、こんな人わからへん、信じられないと思っていても、その役として置かれるとわかるのが本当に不思議」

D「対人援助マガジンの家族造形法について読んでいて、何でこうなるのかと疑っていたが、実際に、そこに置かれたらすごく感じるなあと思うことがある。ただ、そこにいるだけなので、動きがない分、演じる必要ない分、かえっていろいろと感じることができるし、楽でもある」

G「楽だから、苦手感とか恥ずかしさがないし、その分、じっくりと感覚に集中できる」

A「演じるというよりは、役が染み入るという感じ」

早樫「演じることを求められると、得手不得手とか苦手意識、羞恥心が生まれる」

G「造形法は、ただ置かれたままでじっとしていたらいいという教示だから、役割を引き受けたものも簡単とも言える」

A「ロールプレイだと、どれぐらい自分のキャラが役割にはいっているのかなあと考えながら進めているという感じがある。造形法はじっとしていて染み込んでくるものに集中していくということで入りやすかった」

〇難しさ…

E「５年ぐらいになるかなあと思うが、馴染むのに苦労した。頭で考えるタイプなので。演じないといけないと受け止めて、役に入りにくくって。その中で、からだが感じるということを徐々に学んでいったように思う。また、ほかの人のフィードバックを聴くと、自分の感じ方の幅が広がっていった。最初は苦も無くできたのではなくて、自分の中の感性をゆっくりと育てていったという感じ。わからないという感じが最初にあったが、反発はなかった。ある時、ＤＶの加害者役をやったことがある。やる前に頭で考えていた時は絶対に共感できないと思っていた。しかし、造形として体験してみると、誰も自分のことをわかってくれない悲しみを感じたという印象的な出来事があり、しばらく、貴重な体験として持ち続けたことがある。それから、自分の感じ方が一面的なものから多面的なものへと変わっていったような気がしている。この研修で育てられた感がある」

G「そういう意味では、造形法を体験することによって、実生活ではまったく共感できない人がわかるようになる。造形法で想像もできなかった人の役割を担ったことがあったが、やってみるとよくわかる！といった衝撃的な出来事もあった。そういう意味では、他者理解に対して、許容度が広がると言えるかもしれない。共感度が増えるといった方がよいかもしれない」

〇家族造形法は共感のトレーニング

F「共感のトレーニングの場だった。からだから共感していくという訓練だった。そもそも、頭の人だから、最初は変に考え込んでしまって、その役割で置かれてしまった時でも、自分の感じたことで話していいか、それとも役割になった自分として話したらいいのか等、戸惑いがあった。ケースを提出した場合でも、役割

を引き受けた人は一生懸命言ってくれているのだが、好き勝手に言われているといった受け止めをしたりして、抵抗の人だったと思う。抵抗が強かった。頭で考えてしまって、みんなが好きに言っているだけという感じしかなかった」

G「好きに言ったらいい！という感じがある」

F「後になって、造形法がわかってくれば、好きにいってもらった方がケースのためにもなるということも段々わかってきた。どこで、変わってきたのかはわからないが…」

G「そういう風に考える人は、正しい答えがあると思っているのではないか」

F「そうだと思う。ここで、ケースを出すのは、自分の感じ方や見方の幅が広がればと思っている。一つのところしか見えていなかったのが、他のところが見えたり、感じたりできることで、自分自身が広がっていけるから、面接の中でもいろんな角度から見えるようになってきた」

G「実際に、正しい答えなんかない」

F「ここで、何度かケースを出してきたが、不思議なことに、造形を通してみなさんが感じたことがあてはまることがある」

G「一人だけで想像するよりは、チームとして、みんなで広げることが非常に大きい」

F「今回提出したケースでも、提出前に感じていた父親像と提出することによって変化した父親像があり、それは、実際の面接でも変化があった。造形法による事例検討を通して、見方と感じ方が広がる。共感の幅が広がる」

〇改めて、特徴は…

G「非常に便利なのは、忙しい援助者にとっては、準備がいらないというのは大きい。ケースレポートをしようと思えば、記録を読み返し、文章化しないといけない。造形法は準備は不要だし、それに比べて、得るものは多い。提出者の負担がないし、みんなが参加できるし、すごく面白い。一方、これまでいろいろなところで使う中で、難しいと思うのは、女性相談、ＤＶ問題の場合、担当者が混乱することがある。女性の視点に立って、家族全体を考えるという枠組みがあるので、造形法の場合、夫の気持ちがわかってしまったりというようなことになると、何のために、どの立場から支援するのかといった面から、混乱を感じることがある。そこで、説明するのは、全体の立場、それぞれの立場から考えてみた上で、もう一度、その女性の立場に戻って考えてみることの大事さである。とは言っても、みんなの気持ちが分かりすぎると混乱するようだ」

早樫「対人援助マガジンで紹介しているが、造形法の説明については？」

C「この研修の前に、マガジンを読んでいったので、こういうことを感じればいいのだなあというイメージはあった。特に、抵抗はなかった」

G「役に入っていて感じることが、自分自身の固有の反応かどうかと思うことがあるだろうが、それよりも、その人自身の共感性とか感受性とかが大きいかなあと思う。援助職者で造形法を実施すると、

それなりに共感性があるのでやりやすい。それでも、個々の感度がある」

早樫「その通りで、その場がうまくいくかどうかは、役割を引き受けてくれた人の感度によるところが大きい」

G「個人的要因というよりは、その人の感性、感度は大きい」

E「講演をしていて感じるのは、うまくいく時はその場の空気をよく読んでいるとか、聴衆を引っ張るとか、空気感を読める力かなあと思う。自分なりには、その力は付いてきたと思う。造形法の時に、役割を与えられて、置かれて、その人物にどこから入るか、進めるかというのも、その場の空気を読むということからかなあと思う。造形法とはこういうものですと教えられなかったからよかった。自分が感じることが苦手なところも含めて、少しずつ、開いていったような感じがしている」

〇家族造形法の持つ新たな一面

早樫「援助者にとってのトレーニングというのは改めてよくわかった。その人なりに援助者として、開かれていく、磨かれていく上でのツールとしての位置づけということを強く感じた」

G「感受性のトレーニングとしては、かなり効率はいいと思う。自分がこれまで理解したことのないような人について、造形法を通して理解できるのだから…」

早樫「事例検討を通しながら、援助者、参加者の感受性訓練をしているということやね」

G「それから、視点を広げるとか、いろんな視野から家族を眺めてみることの大切さなどを体感的に味わうことができる。個人臨床がメインであれば、家族をシステムとして見る訓練にもなる。家族を視野にいれてシステムとして考えてみると、一対一で出会っている時には見えなかったこと、感じなかったことが出てくる。また、援助者も含めた造形によって、家族にとって、援助者が及ぼしている影響も見えやすくなる」

B「そもそも支援者のためのプログラムですか？」

早樫「元々は、家族療法の相談場面で生まれ、相談家族に対して用いられた技法。特徴は視覚的、体験的、非言語的なコミュニケーションに焦点をあてている点など。私自身は、事例検討としてアレンジして使ったり、援助者自身の自己覚知のプログラムの中で、団先生とやっている」

〇「家族造形法の面白さと難しさ」をふりかえって

急に、座談会をお願いしたにもかかわらず、みなさん、積極的に発言していただきました。

限られた時間の中で、事例検討法としての家族造形法の面白さや難しさについて、とても率直で新鮮なお話が伺うことができ、興味深い座談会となりました。

ありがとうございました。

家族造形法の深度

家族造形法を使った事例検討　その７

早樫 一男

語り手：古川秀明さん（ふるかわ家族カウンセリング研究所長　臨床心理士）

〇はじめに

前回に引き続き、「家族造形法のおもしろさと難しさ」がテーマです。今回は一人語りです。語り手の古川さんは、ふるかわ家族カウンセリング研究所長として、対人援助領域、相談現場において活躍されています。

研究所の主催として、2002 年から「家族援助を目指す人のための研修会」を京都キャンパスプラザで開講（5 月～12 月　月 1 回 19 時 30 分～21 時 30 分）。私が進行役をつとめてきました。今年で、10 年目となる研修会には、福祉領域、看護領域を始め、さまざまな対人援助領域からの参加者が含まれています。内容は、もちろん、家族造形法を使った事例検討です。

〇それでは、古川さん、よろしく！

造形法のおもしろさと問われると、立体的に家族を理解できたり、家族の気持ちをその役割を演じるひとから直接聞けるということなどがあるが、私の場合は人間のつながりを感じることだ。その家族の中で、そういうポジションに置かれると、人というのはたいてい同じようなことを感じたり、考えてしまうということに驚きとつながりを感じてしまう。

家族造形法の研修会を１０年続け、たくさんの実際のケースを研修会で検討したが、役割を演じる人からのコメントは驚くほど事実に近い。これを悪用すれば怪しい占いや宗教にも応用できそうだ。もちろんそんなことが目的ではない。あくまでもケースを考える上でのスキルなのだから…。

しかし、何ゆえ役割を演じる人はここまで事実に近いセリフを言ったり、感情を経験したり、行動を言い当てたりできるのか。演劇をする人がよく「役作りをする」とか「役に入り込む」とか言うがそれとはまた違うものなのだろうか・・・。

「共感力」なのか、あるいは何らかの無意識の誘導が造形を作る人から役割を演じる人に伝わるのか・・・。

これを「乗り移る」という表現を取ったらそれこそカルト宗教みたいになるので表現が難しい。勿論、役割を演じる人と、その役の実人物とはまったく接点はない。いや、逆に接点が合ったほうが事実とは離れて行くのかもしれない。

その人が持っているイメージとか、先入観が作用してそれらしい話にみんながまとめてしまうかもしれないからだ。
役割を演じる人はケースごとに毎回違う。当然個人の生育暦も違うし今現在さまざまな問題を抱えている人もいる。けれど、造形法で役割演技をすると、誰がどの演技をしてもその言動は事実に近くなる。
相手の身になって物事を考えろとか、相手の気持ちになってみろとかよく言うけれど、造形法をやっていていつも思うのは、自己と他者を分けている境界は何だろうかということである。私のこのような造形法に感じているおもしろさやつながり感覚は、同時に私のこれからの研究対象でもある。

〇ここで一言（早樫からのコメントです）

古川さんは「役割を演じる」という表現の中には次のような流れが含まれています。
事例提出者は「粘土のかたまり」と見立てて、家族役を置いていったり、作っていきます。そして、「静止」の中で、湧き上がってくる感情や身体感覚に注意を向けていきます。演じるという言葉からは、ロールプレイをイメージする人があるかもしれません。造形法の場合の「役割を演じるというのは、徐々に浸み込んできた感情や気持ちに沿って、表現（言語化）する、時には動くといった意味が含まれています。

〇さらに、おもいしろいのは…。（引き続き、古川さん、よろしく！）

造形法では時間を自由に操作できる。現在、過去、未来とどんな時間でも作り出すことができる。場所も想像力さえあればどんな設定も可能である。これもおもしろさのひとつである。タイムマシンと、ドラえもんのどこでもドアを手に入れたようなものだ。

〇難しさをあげるとすれば…

まずは造形法を実施するのに、必要な場所の確保である。ある程度のフロア（ステージ）は必要。多くの会議室や研修室は当然のことながら机や椅子があり、それだけでスペースはいっぱいである。机、椅子を片付けて、尚且つ一定のスペースの確保ができないといけない。かといって、体育館では広すぎる。
会場準備に手間と人手が必要になる。
ある程度の人数の確保も必要である。できれば、最低、家族の人数分の参加者はいて欲しい。造形法は役割を演じる人と同じくらいそれを観察しているギャラリーの意見も重視する。なので、理想は家族の人数分の粘土とその数と同じ数のギャラリーがいればいいなと思う。５人家族のケースなら、粘土５人、ギャラリー５人くらいがいて欲しい。
参加者には造形法の説明がいる。特に初めて参加する人には、なぜこういうことをやるのかの説明が必要であろう。よくある質問に「役割としてコメントするのですか？本当の自分としてコメントするのですか？」と聞かれる。「どれが本当の自分かわからない」「役割の人と自分とは別の人間なので、こんなことをしても意味がない

のでは？」これらの質問に答えられるようにしておく必要がある。

〇これまでの経験から…

研修会等で造形法を実施するとかなり盛り上がる。まるで子どもの学芸会のような雰囲気になることもある。参加者のコミュニケーションを促進するのにはとても効果的に働く。しかし、ただおもしろいだけに終わらせてはいけない。
ファシリテーターの力量はかなり問われる

〇その他…

最近は自分で家族造形法をアレンジして試している。相談者がひとりで来た時に、相談者と一緒に家族の問題を考えるのに何とか造形法を使えないか・・・・。勿論急に人を呼んで造形法をするのは無理。そんな時間も場所もマンパワーもない。
そこで箱庭を使ってみた。これなら相談者が一人でも大丈夫。箱庭のグッズには、家族の人形は勿論、家具調度品、家（日本建築からログハウスまである）、庭、ペット、仏壇、幽霊まで揃っている。場面を設定したらそこに人形の家族を置いてもらう。誰から置くのか、どういう順番なのか、目線はどこか・・・。最近の人形は手足などが自由に動くので、かなりの表現が可能だ。勿論、生の人間が造形法をしているような温かみはないが、かなりの効果はある。純粋な箱庭療法でやるような分析的なことはできないが、セラピストに守られている感覚や、砂遊びによる開放感などは同じ効果が望める。
箱庭に置いた家族の人形をみて、「家族はどんな気持ちでしょうね？」と尋ねたり、「このお父さん人形をこう移動させたらこの子ども人形はどう感じるでしょうね？」というのを相談者と一緒に考えられる。「今のこの家族の形を理想の家族の形にするには誰がどのように動いたらいいですか？」「そうなるためにはどの人形がどうすればいいですか？」応用範囲は広い。セラピストと相談者が家族の箱庭を一緒に俯瞰するのは、ジェノグラムの作成プロセスにも似ている。
これからも研究を重ねたい。
もうひとつ考えているのは、母親のための自分で作る家族造形法。造形法は、援助者が次の展開を考えるために行うことが多い。これを、母親が自分の家族を作って、粘土といろいろやりとりしたらどうなるだろうか・・・。
主観的で感情に流されない、何か新しいひらめきや発想、行動の指針などが生まれないだろうか。別に母親限定でなくても、父親や子どもでもいいのだが、まずは母親で試してみたい。

〇おわりに…

古川さん、興味深い語り、ありがとうございました。これからも、家族造形法のよき理解者の一人として、活躍を期待しています。

なお、「家族援助を目指す人のための研修会」に興味のある方などの問い合わせは、ふるかわ家族カウンセリング研究所のＨＰ「tantant.net」から連絡ください。

家族造形法の深度

家族造形法を使った事例検討　その８

家族造形法の面白さについて語る

対談相手：興津 真理子（同志社大学心理学部）

早樫 一男

早樫：興津さんは「家族援助を目指す人のための研修会（ふるかわ家族カウンセリング研究所主催）」に長年参加されています。家族造形法と出会った頃、どのような印象でしたか？

興津：家族造形法と出会って 10 年になります。最初の頃は何やらわからぬまま，「人形＝役」になっていたように思いますが，自分とはかけ離れた「役」を引き受けても，その場で感情（しかも思いがけない気持ちの場合もあります）が湧き上がる面白さや，自由に事例や家族のことを考えることができることの面白さ，いろいろな現場での事例に出会える面白さに惹きつけられ，ここまで続けて参加してきました。

早樫：この間、感じてきた面白さについて，詳しく聴かせてください。

興津：家族造形法が他の多くの技法と異なるところは，そこに感情を伴う主観的体験が生じるというところであり，この特徴に私自身は強く惹きつけられていると思います。今でも思い出すのは，とある老舗の祖母役をやった時に，問題は IP である小学生の孫の不登校だったと思いますが，造形が出来上がった時に，湧き上がった思いは「この家は安泰や，息子も孫もちょっと頼りないところもあるけど，この家は自分が守ってきたようにこれからも続いていく」という安心感でした。造形前には思いもよらなかった気持ちでした。こうした「感情を伴う主観的体験」を，造形を作った後に彫刻家（制作者）がインタビューしていき，先ほどのような「気持ち」や「感じ」をそれぞれの役をとった人が語ります。不思議なことにここで語られる言葉は，実際に本人が話していたことと一致することも少なくありません。これは自分が事例を出してみるとよくわかります。

早樫：家族造形法を使った事例検討の場で

は、役を引きうけた人からのフィードバックの言葉が、実際にそのケースの面接の中で語られた言葉とまったく重なっているという経験をよくしますよね。事例提出者もとても驚きます。

興津：このような感情の生起をめぐって，実は人間の感情というものが想像以上にプリミティブというか，個人差を超えた単純な生起プロセスをベースに，個人差を含む社会的な要素に彩られて出来上がっているのではないかというのが，最近考えていることです。感情がこういう性質のものだから，家族造形法という技法が技法として成立しうるのではないかということなのですが，これは心理学でもあまり研究がおこなわれていないことのように思います。たとえば，社会心理学の領域に「パーソナルスペース」という概念があります。これ以上近づきすぎると気づまりという距離が各自にあり，それは，近づいてくる人の性別や関係性などにより変化するというものです。家族造形法でやっているのは，これとちょうど逆のことで，相手を配置し，その位置での「気づまりさ」を述べさせているようなものです。相手との心理的距離を物理的に配置し，その距離によって生じる感情を記述するが，これだけでも人には何らかの感情や思いが生じるのが興味深いところです。不自然な姿勢をとった時の苦痛，置かれた手から感じる暖かさから感じる安心感，指を差されているということから感じる戸惑いあるいは不快感こういったものが組み合わさって造形はできあがっていますが，人が日常的に感じている感情も，特別なスクリプト以上に，対人関係のなかでの心的距離感や物理的な側面に置き換え可能な要素で案外単純に引き起こされている部分があり，だからこそ造形で語られる体験が実際のその人のものと類似してくるのではないかと考えています。今後実験的に検証してみたいと考えているのはこのあたりのプロセスです。

早樫：事例検討に長年参加されている中で、家族造形法を通した体験や事例検討のもたらす意味などについては、どのように考えておられますか？

興津：家族造形にこうした主観的体験を促す特徴があることによって何が得られるのでしょうか。とくに事例検討で家族造形を用いることの意味から考えると「多方面への肩入れ」を可能にするというメリットがあると思います。わかりやすく感情表現をしている人や注目を集めやすい人だけでなく，援助者が肩入れしにくかったり，家族の中でどのように感じているのかを推し量りにくかったりする家族成員の気持ちにも同じ重みで目が向けられるということは重要な特徴だろうと思います。例えば，ある月の造形研修会で，父親から娘への性的虐待ケースの造形が行われま

した。被害者である娘の感情にはもっとも目が向きやすいと思いますが，加害者である父親は憎むべき存在，母親は娘をサポートすべき存在という枠組みでしか通常は見られないのではないかと思います。しかし，研修会で造形を置いてみたことによって，このようなケースで離婚を選択しない母親の心情に目を向けることになりました。夫の裏切りによる傷つき，女性としての傷つき，娘を守りたいと思いながらも娘によって自分が傷ついた面もあるということに対する複雑な心情，それらを思えば，母親が全面的なサポーターとして娘を援護するということの難しさと，母親が母親として娘を守れるようにするためにもまた，周囲からのサポートが必要であろうことを考えさせてくれたと思います。IP を援助するにも，家族を援助する必要性があり，そのためにも援助者が家族全員に肩入れすることが大切なのではないかと感じました。

早樫：家族造形法を使った事例検討は、いつも、「Here　and　Now」の面白さがあると感じています。その面白さに、やみつきになっているというか…。主観的な体験以外には、どのような特徴や面白さを感じておられますか？

興津：ここまで家族造形法が感情を伴う主観的体験を引き出す技法であるということに関して述べてきましたが，家族造形法の技法としての面白さは他に，包括性とでもいいましょうか，二者関係を超えた家族の様相が端的に表される点にもありますし，また，実験的であるという点にも特徴があります。実験的というのは，「もし…したら」を試してみることができるということで，「誰かにセラピストがついたら他の家族がどのように思うだろうか」とか，「子どもが生まれる前はどのような家族だったのだろうか」とか，「将来この家族成員が巣立ったら，家族はどのようになるだろうかという可能性について，検討する手立てとなりうるということを指しています。また，基本的な事ですが非言語的であること，情報が多少欠けていてもできる技法であるという点も造形法のメリットだと思います。

早樫：一方で、短所というか、難しさや困難さ、あるいは課題や限界というのもあると思います。どのようなものでも、万能ではありません。

興津：第一にどのようなものかを伝えるのが難しい技法であるという点です。とにかく体験的であるが故に，その良さ，面白さを伝えるのが難しいということには常に頭を抱えてきました。伝え手の課題でもあり，私などは講義などでも，最近ようやく関心を持ってもらえるような伝え方ができるようになってきたのかな？というところです。一方，受け手の方も

自分がケース対応で困難を感じたことがなければ，家族造形法による検討の持つ意味もまた理解しにくいと思います。だから，これまで興味持った学生を研修会に参加させてもらいましたが，一度体験して終わりになる場合が多かったのだろうと思います。体験してみて面白かったとは言いますが,「これは使える！ぜひ続けてやってみたい！」とか,「これについて研究をしてみたい！」とはなりにくいようです。この点は，使えると思う人がやればいいことなので,短所というほどでもありませんが，今後，事例を家族造形法で検討する前後での事例提出者の家族イメージや見立ての変化や，介入についてのイメージの広がりなどについての検討や，継続的に参加している人が，どのようなメリットを感じているのかを検討することによって，家族造形法による事例検討の良さをもっと引き出していけたら,「興味」が「使えるかも」という気持ちに発展する手助けになるのではないかと思います。だから，後者について，この早樫先生の連載で他の方がどのように話されるのかにもとても興味があります。第二の短所は数人の人手が必要であるという点です。数人でやることによるメリットも多いのですが,こと実施という点に関しては，技法を使ってみようということのハードルを上げているところはあると思います。しかし，これらはいずれも決定的な困難かといわれるとそうでもないなとも思います。映像教材の製作などでも伝え方はクリアできると思いますし，面白さや有用性がうまく伝われば，人は集まるだろうと思います。少しでも多くの人に家族造形法の魅力が伝わればと思います。

早樫：家族造形法の面白さをどのように伝えていくか、さらには、家族造形法を継続して使えるツールとしてどのように伝えていったらよいかは、大きな課題だと思っています。最近は、定期・不定期の研修会だけではなく、ある福祉施設の事例検討会でも定期的に活用しています。多忙な現場においては、準備に時間をかけなくてもよいところも大きな利点です。それにも関わらず、さまざまな意見が出されたり、自由に語ることで、チームワークの向上にもつながっているのではないかと感じています。結果として、職員の感性に磨きをかけるといった作用も果たしています。家族造形法に関する興津さんの取り組みに期待しています。どうもありがとうございました。

家族造形法の深度

研修会のご案内

家族造形法を使った事例検討　その９

早樫 一男

１９８８年に家族造形法と出会い２０年以上経過しました。最初の頃は、家族面接ケースで実施していましたが、ある時期から事例検討などで利用することが中心となり、現在に至っています。家族造形法の進行役はもちろんのこと、時には、さまざまな家族役を担ってきました。

事例検討や援助者自身の「原家族」をテーマに扱ったプログラム（京都国際社会福祉センター主催　対人援助者のための自己覚知「原家族と向き合う」　団士郎先生と共同講師を務めています）において、参加メンバーのテーマに即した、さまざまな家族造形法の展開を体験する中で、その面白さや奥深さに惹かれていきました。

ところで、先日、家族造形法を用いて事例検討している場面を第三者として、動画で見る機会がありました。

その時の率直な感想は、「いったいこれは何をやっているのだろう？」というわかりにくさでした。

なぜ、このような印象を持ったのかについて考えてみると、たとえば、カメラのアングルや撮影意図との関連を無視できないということが浮かび上がりました。

動画は一台の固定のカメラで全体が降格で写るようにとセットされ、さらに、記録の意図を中心に撮影していたのです。非常に無機質なものであったと言えるかもしれません。

家族造形法を使った事例検討は、毎回、ある種のライブ感覚の中で、ケースと関わっているという実感があります。さらに、からだを通した感覚ともいえる肌合いや接触感、空気感や温度感を感じることになるのです。もちろん、距離感が大きな意味合いをもたらすこともあります。

さらに、快・不快感、怒りや寂しさ、孤立・孤独感、居心地感等など、あえて言語で表現するならば、家族を造形すること（家族が造形されていくこと）を通して、何が

しかの「心情」が湧き上がってくる不思議さを参加者は感じたり、確かめ合ったりすることができるということが、家族造形法にしかない妙味であり、面白さであると言えるかもしれません。

撮影の仕方を考えることによって（例えば、カメラを複数にする、それぞれの家族メンバーの視点に合わせたアングルにする等など)、家族造形法の面白さが少しでも伝わるような工夫の余地はあるかもしれません。

映画やＴＶなどの映像を通して、見るものに感動を与えるといった場面では、事前にさまざまな手法や計算がなされた上で、訴えかける工夫や準備が充分になされています。

家族造形法も十分に撮影の準備がなされ、家族造形法の面白さや奥深さを伝える工夫ができない訳ではないかもしれません。

しかし、ライブ感覚からは距離が生まれた、作られた映像になってしまうかもしれません。

家族造形法の動画を第三者的に見る機会は、改めて、家族造形法の面白さや奥深さを伝えることの難しさを感じ、考えることができた時間となりました。

家族造形法を使った事例検討は家族としての体験に近づけること、援助者を含めたシステムについても考えたり、感じることができること、家族の変化のイメージを作ることによって援助の方向性を味わってみることができることなど、さまざまな発見が生まれてくるのです。

ということで、研修会の案内としては、非常に長い前置きになってしまいました。

家族造形法の面白さを動画や文章では伝えにくいだけに、少しでも多くの人に直接伝える機会を作りたいと考え、次ページのような研修会を企画いたしました。タイトルは「家族造形法の深度　～二日間　家族造形法　ざんまい～」です。

二日間の内容としては、以下のような予定です（あくまでも予定であり、告知もなく、突然、変更する場合がありますが、ご了承ください)。

① オープニングは、これまで、家族造形法を使ってきた早樫が家族造形法について語った後、参加者と家族造形法を体験します。
② 家族造形法を使った事例検討の経験を通して、古川先生・村本先生・興津先生の３人のゲストスピーカーが自由に語ります。
③ この機会に交流会も企画しています。立食形式で、自由に語り交流を深めたいと思います。
④ 二日目のスタートは、団先生の経験を通した語りです。内容はお楽しみに。
⑤ さらに、「実践的事例検討」はジェノグラムと家族造形法のコラボレーション企画です。
⑥ ゲストスピーカーの岡田先生にも、フリーに語っていただく予定です。

家族造形法をキーワードにした二日間の研修。

初秋の京都を楽しんでいただけるかもしれません。

みなさまの参加をお待ちしております。

「家族造形法の深度」（研修会のご案内）

～　二日間　家族造形法　ざんまい　～

○日時　2012 年 9 月 29 日（土）13 時（受付）　～　30 日（日）16 時
○場所　同志社大学継志館２階　２０１会議室
（〒602-0932　京都市上京区新町今出川下ル徳大寺殿町 345
○定員　５０名
○参 加 費　５０００円
交流会費　５０００円（立食パーティー　フリードリンク付）

○タイムスケジュール（予定）

２９日（土）

13：00　「受付」
13：30～15：30「家族造形法を語る①　そして、体験する」
スピーカー及び進行役：早樫一男（同志社大学）
16：00～18：30「家族造形法を語る②」
ゲストスピーカー
古川秀明（ふるかわ家族カウンセリング研究所）
村本邦子（女性ライフサイクル研究所　立命館大学）
興津真理子（同志社大学）　他
19：00～「交流会」　寒梅館７階　「SECOND　HOUSE　WILL」

３０日（日）

9：30～10：30「家族造形法を語る③」
スピーカー：団　士郎（仕事場Ｄ・Ａ・Ｎ　立命館大学）
10：30～12：00「実践的事例検討：家族の物語を中心に」
進行役：千葉晃央（京都国際社会福祉センター）
ゲストコメンテーター（午前・午後とも）
岡田隆介（広島市児童療育センター）
12：00～13：30　昼食休憩
13：30～15：30「実践的事例検討：家族造形法を中心に」
進行役　早樫一男、古川秀明
15：30～16：00　クロージング

○申し込み、問い合わせは　メール khayakas@mail.doshisha.ac.jp
もしくは　FAX　0774－65－7097（いずれも早樫宛て）
○申し込み内容　名前、年齢、性別、所属、
連絡先アドレス、携帯（電話）番号
○申し込み期限　８月２６日（日）
期限前でも定員になり次第お断りします。
期限直前の申し込みは事前にお問い合わせください。
○その他
・宿泊が必要な方は各自で手配してください。
・参加費、交流会日は当日徴収します。
・家族造形法については、「対人援助学マガジン」の HP より、「家族造形法の深度」を参照ください。
※会場の案内

交通機関

- JR 京都駅から地下鉄烏丸線　今出川駅 6 番出口から徒歩 5 分
- 京阪電鉄京阪本線　出町柳駅から徒歩 20 分
- 京都市バス　上京区総合庁舎前から徒歩 3 分
- 京都市バス　烏丸今出川から徒歩 7 分

家族造形法の深度

10　家族造形法の展開　あれこれ

早樫 一男

〇はじめに

相談事例の実践的検討方法として、家族造形法を活用することについては、これまで、報告してきました。今回は、相談事例以外の活用や展開について紹介します。

事例提出者や担当者が彫刻家役になる、参加者の中から家族役を選ぶ、それぞれのメンバーを粘土のかたまりと思って家族イメージを作っていく、完成後のフィードバックを大切にするといった一連の流れ（基本）については大きく変わりません。

〇その１　児童養護施設での展開

処遇困難な児童が増えているといわれている昨今、児童や保護者にどのように向き合うかといったテーマは直接処遇職員が抱える大きな課題の一つです。

そこで、ある児童養護施設での事例検討に家族造形法を活用しました。その活用や展開について、３パターン紹介します。

まずは、入所児童の家族を造形として配置することです。具体的には、入所前の家族（イメージ）、面会・帰省時の家族（イメージ）、さらには、退所後、想定される家族模様（あるいは、こうあればいいなあという家族イメージ）などです。いずれを造形するにせよ、改めて、児童本人や家族の理解を深めることが可能となります。

二つ目の展開としては、施設入所中の子どもたちの関係を配置してみるといったものです。「家族造形法」というネーミングですが、造形法は、一緒に暮らしているメンバーの関係性や全体像を俯瞰できる、理解できるといった意味においては、「家族」に限っているものではありません。むしろ、子どもたちを取り巻く人間模様を具体的、視覚的、さらには、体験的に把握できるのが家族造形法の強味です。施設職員が子どもたちの役になってみるということを通して、体感的に学ぶことも大きな利点です。

３つ目の展開としては、子どもたちの周辺に、さらに、職員も配置するといったものです。造形法の特徴である距離感や視線などから、職員との関係性についても様々な発見が生まれます。

児童養護施設での活用は、職員間の情報共有の機会となります。一つのケースをみんなで考えているといった一体感も生まれることになります。そして、いろんな役を引き受けて、フィードバックするといったことに取り組んでみると、経験の差は気にしないで発言することも可能になります。もちろん、自分たちの関わり方にも目を向けてみるということにもつながるのです。児童養護施設での家族造形法の展開は、施設職員の自己覚知や研修にも大いにつながるものです。

これまでの経験では、学級集団や職場集団を造形として扱ったことがあります。

○その２　援助者向けの家族造形法紹介プログラム

今年の夏は、家族心理学会でのＷＳや支援者支援研修（主催：立命館大学人間科学研究所）で家族造形法を紹介するという機会がありました。

参加者は３～５０名という多数の中で、「家族造形法の体験」をメインテーマにプログラム展開を心がけました。進め方の概略は次のようなものです。事例は事前に準備をしておきます。彫刻家役はこちらのスタッフの一員です。参加者の中から、家族役を選ぶということはいつもと同じです。

まずは、参加者全体で大きな円を作り、その中で、デモンストレーションのような形で家族を配置していきます。必要に応じて、家族造形法の進め方の解説を挟みます。家族役以外の参加者は、観客として、造形を眺めることになります。観客は、彫刻を見ての感想などを数人のグループに分かれて意見交換します。家族役からのフィードバックはいつものとおり行います。

ここまでが第一段階とすれば、次は、グループごとに分かれての造形体験です。デモンストレーションで作った造形を再現します。ファシリテーター及び家族役はグループの中から選ぶことになります。その後は、グループごとに展開を考え、実施していくというものです。

講義や概略を聞いているだけでなく、また、事例に関しても、頭で考えるのではなく、実際に造形として配置されることによって生まれてくる感情などに集中するという体験は参加者にとって、とても新鮮だったようです。

それぞれの実践現場に合わせて、少しでも、家族造形法を活用してもらえればという思いを強くしました。

○「対人援助職のための自己覚知－原家族と向き合う－」（ＷＳ）での活用

このワークショップは、参加者自身の育った家族の中で、課題として抱えていることや未解決の課題について取り組むことをメインテーマとしています。

進め方は次のようなものです。家族情報について、ジェノグラムを作成しながら確認（共有）します。その後、家族造形法の手法を用いながら、家族を配置することによって、家族についての考察を深めていく作業が始まります。ここでの家族造形法は援助者自身の原家族のことを考えていく入り口として機能しています。その後の展開

は様々です。

参加者は、自分自身の家族が話題になる際には彫刻家の役割からスタートします。基本は原家族（イメージ）を造形として配置していきます。自分の家族以外のときは、他の参加者が提示した家族の役割を引き受けることになります。丁寧なフィーバックを重ねながら、展開していくのがこのＷＳの特徴です。

ある人は、幼いころの家族を造形し、さまざまなフィードバックを確認したのち、「これからの家族」を配置してみることにもチャレンジしました。

家族の歴史や大きな節目に沿い、時間をたどりながら、その時々の家族模様を造形として作ったメンバーもいました。その都度、それぞれの役を引き受けた人からのフィードバックを丁寧に聞くことによって、さまざまな発見がありました。

あるメンバーは、原家族の造形後、「このようにあったらいいなあ」という配置を確認。その後、両親役との対話場面にチャレンジすることになりました。また、あるメンバーは、家族の位置に入ることにチャレンジしました。実際に体感することによって、何かを発見したようです。さらに、あるメンバーは、家族の大きな節目に沿って、家族造形を展開していくプロセスを通して、ジェノグラムの説明による家族イメージと家族造形により配置された家族イメージのギャップに気づくことになりました。

造形完成後、参加者は関心がある家族の周りに集まり、意見交換するという展開としたこともあります。その上で、これからの家族の関係について、いくつかの家族造形（配置）作ってみるという展開を試みました。

繰り返しになりますが、このプログラムにおいては、原家族のことを考えるキッカケとして、家族造形法を活用しています。自分自身の家族について考える際には自ら彫刻家になります。そして、他のメンバーが彫刻家の時は、さまざまな家族役割を取ることになります。展開はさまざまであり、毎回、まったく同じものはありません。

自分自身の家族をテーマに取り組んだ際には、新たな発見を手に入れることができます。さらに、他の家族のメンバーを引き受けることによっても、自己覚知が深まっているという点が興味深いところです。

〇あらためて、一言

家族造形法の活用場面や展開はさまざまです。家族造形法の体験を通して、参加者に不思議な一体感が生まれるということを、その都度、体験してきました。この不思議な体験や感覚こそ、家族造形法の妙味なのかもしれません。

家族造形法の深度

11　事例検討における家族造形法の展開

「アウトサイド」と「インサイド」

早樫 一男

家族造形法を使った事例検討の場合、事例提出者（彫刻家役）の作る作品（家族彫刻）は、あくまでも事例提出者によるケース（家族）のアセスメントや見立てです。

「アウトサイド」から理解した家族イメージを「造形」というかたちで、視覚的・具体的に再現したものと言ってよいかもしれません。家族メンバーを配置することによって、家族システム（全体）へと視野を広げることもできます。

家族役からのフィードバックはさまざまなヒントを与えてくれることになります。「インサイド」からの声と言ってよいかもしれません。家族役に対して、細かな情報を伝えていないのに、実際の面接の中で語られた「言葉」を、家族役がフィードバックの言葉として語るという不思議な体験はこれまでたくさん経験してきたところです。このような場合、事例提出者のアセスメントが大きく間違っていなかった考えることができます。

事例提出者にとって予想外の言葉がフィードバックされたなら、それは新たな気づきにつながっていきます。

家族造形法を使った事例検討は、従来から行われている机上の事例検討ではなく、体験を通した事例検討法である分、ライブ感覚も含まれた展開であるということについてはこれまでにも言及したところです。

また、展開によっては、事例提出者はもちろん、参加者にとっても興味深いものとなります。

これまで紹介しているように（第２号～第５号　参照）、第一段階は、事例提出者のイメージとして思い浮かぶ家族（造形）を作ります。そして、各メンバーからのフィードバックとなります。

その後の展開の一つ（第二段階）を紹介します。

居心地のよい状況（関係）を作る
確認する

各メンバーの感想（フィードバック）はさまざまです。自分自身の姿勢や相手との

関係（距離感や視線の向きなど）を通して、「とても楽だ」「あたたかい」「安心できる」といった肯定的な感想がある一方、「窮屈」「しんどい」「居心地がよくない」「居場所がない」などといった否定的な感想もあります。もちろん、その両面について、語られることも少なくありません。

そこで、これらのフィードバックを丁寧に確認した後、『それぞれにとって居心地のよい状況を作ってみましょう』と提案することが少なくありません。

家族が自ら動く
他の家族の動きに触発されて動く

その際、家族役に対して、自ら動くように教示しています。もちろん、ある家族役の動きに触発されて、他のメンバーが動いても構いません。ある家族メンバーの関係の変化は他にも波及するからです。それは家族がシステムである所以です。

「居心地のよい状況」が作られていくプロセスや家族の動きの変化を「アウトサイド」から見ていると、は大変興味深いものです。

最終的に「居心地のよい」家族造形を作った後は、改めて、しばらく静止し、その時の気持ちに焦点をあてます。その後の各メンバーからのフィードバックは、静止している時に感じたことだけでなく、完成するまでの動きを通して感じたことも語ってもらうようにします。

ファシリテーター役は、家族役同士の意見交流はもちろんのこと、事例提出者や観衆役などとの交流にも心がけます

改めて、「アウトサイド」と「インサイド」

最初の造形は事例提出者が「アウトサイド」から見た作品ですが、家族役が主体となった「居心地のよい状況」は「インサイド」からの作品となります。

前述したように、「居心地のよい状況」が作られていくプロセス（家族役の動き）について、興味深く注目していると、新鮮な発見をすることもあります。それは、家族の変化のありようです。

ところで、第一段階は事例提出者が「アウトサイド」から造形を作り、「インサイド」の声に耳を傾けました。「居心地のよい状況」を家族役自らが作るという第二段階は、「インサイド」からの動きを「アウトサイド」が見守っているのです。

準備に時間を要する必要がない（事例提出者のケース理解と簡単な家族情報があればいい）、参加者が一体となって事例のことを体験的に考えたり、味わうことができるなど、対人援助現場におくる利便性と展開可能性、面白さはさまざまです（第６号～第８号　参照）。

対人援助とは、援助者が「アウトサイド」から見た理解（アセスメントや見立て）と利用者や家族による「インサイド」からの語りを「家族の物語」として織り込んでいく作業なのかもしれません。

家族造形法を通した事例検討はこのようなことを示唆しているようです。

家族造形法の深度

12　事例検討における家族造形法の展開（続き）

早樫 一男

はじめに

事例提出者（彫刻家役）の作る作品（家族彫刻）は、あくまでも事例提出者によるケース（家族）のアセスメントや見立てを視覚化したものです。その造形作品を第一段階として、家族（役）の声を聴きながら、さまざまな角度から、さらに家族の理解を深めていきます。

その後の展開（第二段階）として、「居心地のよい状況（関係）を作る　確認する」や「家族が自ら動く　他の家族の動きに触発されて動く」といったバリエーションについて、前回、紹介しました。

今回は、さらにさまざまなバリエーション（私がよくやるアレンジ）の紹介です。

動きをつける

彫刻家役が見立てた家族造形作品（第一段階）において、動きをつけることがあります。

例えば、「母は台所で食事の支度をしている（包丁で野菜を切る）」や「長女は顔（視線）を左右に動かす（父や母を交互に見る）」といった動き、「家族の間を動きまわる（次男は母と祖母の間を行ったり来たりする）などです。

動きを指示された役の人は、一分間、その動きを繰り返します。そして、静止している人と同じように、一分間の間で感じることを後ほどフィードバックします。動きが付与されることによって、時には、さらに、新たな気づきが生まれ、興味深いコメントにつながることがあります。

担当者（彫刻家役）が家族メンバーの役になってみる

第一段階で作った造形でのフィードバック後、家族役を担当者自身が交代して、担ってみるという展開です。例えば、担当者が苦手だと感じていたり、理解しがたいと思っている家族メンバーを引き受けてみるといったものです。また、問題だと言われ

ている家族メンバー（本人）になってみることもできます。

もちろん、一分間、静止してみて、どのようなことを感じるかということについて、集中します。この展開は、体感的な家族理解につがるものです。もちろん、援助者自身の感受性訓練にもなります。

援助職に携わっている者は、対人援助場面では援助者という役割で機能しています。一方、家庭では夫や妻、父親や母親、息子や娘といった役を演じていると言えるかもしれません。もちろん、職場でもいろいろな役割を担っていることでしょう。

さまざまな家族のストーリーの中での家族役を引き受けてみるということはとても面白いものだと、個人的な感想を持っています。人生の幅や深みが広がるような気がします。

担当者を入れた
援助（治療）構造を造形する

第一段階で作った家族造形の中に、援助者を置いてみるのです。担当者本人が家族造形の中に入ることもできますし、担当者役を作って置いてみることもできます。また、現在の援助者の位置を配置することはもちろんのこと、今後、援助を考えている場合はその位置取りについて、置いてみることもいいでしょう。

援助者のスタンスを家族はどのように受け止めているのか、家族に受け入れられやすい（受け入れがたい）援助者の位置取りについても、具体的に、イメージする上でも、参考になるヒントを手に入れることができるでしょう。

家族史を順に作っていく

家族は時間経過の中で変化していきます。家族の変化に沿って、さまざまな感情が生まれたり、消えたりしていきます。日常の生活もそのような繰り返しかもしれません。

家族史というのは、夫婦だけの頃（親世代との同居も含む）、子どもの誕生、家族メンバーとの別れ（離別や死別）や新たな家族との出会い（夫婦の再婚や義理のきょうだいの登場）などです。

家族の歴史に沿った造形を丁寧にたどる（作ってみる）ことを通して、家族メンバーの気持の変遷について、さまざまな発見をすることができます。

ロープ（ひも）の導入

家族メンバーのつながりを視覚化するものとして、ロープ（ひも）を使うことがあります。手芸用品店で手に入るさまざまな色のロープ（ひも）を私は用意しています。

彫刻家役が家族のつながりの象徴として家族メンバー間の間に持たせる（つなげる）場合もあれば、家族メンバーが選んだロープ（ひも）を他の家族メンバーに渡すように指示することもあります。

ロープ（ひも）は、さまざまな象徴として機能します。家族間のコミュニケーションの有無やありよう、つながり（「絆」と言われるもの）だけでなく、拘束やしばりや支配（まさにヒモ）の象徴となる場合もあります。また、ロープの色彩は感情を象徴するものとして、意味を持つことがあります。

理想的と考える関係
（援助プラン　家族イメージ）を作る

イメージとしては、前回紹介した「居心地のよい状況（関係）を作る　確認する」に近いものです。

まず、家族の見立てを造形にした作品（第一段階）をベースとして、フィードバックを確かめた後、進行役が「家族自身がこうあればいいなあという家族の風景（造形）をイメージして、家族役が自ら動いてみてください」と教示する場合があります。

事例提出者（彫刻家役）は家族の動き（変化）を注意深く観察します。誰から動き出したのか、その変化の動きに触発されたのは誰か、等々、家族システムの変化を見るのです。

家族の動きがたまったところ（家族が作り上げた造形作品）で、一分間、静止した後、その感想を尋ねます。その際には、最初の造形との違い、動いている際の気持なども確かめるようにします。

また、彫刻家が「こうあればいいなあ」という造形（家族の変化、治療目標）作ってみるように指示することもあります。静止後、確かめるポイントは前述のものと同じです。

これは、援助者の思いと家族の思いのすり合わせの機会です。前回の「居心地のよい状況（関係）を作る　確認する」でのコメントと重なる部分です。

おわりに

彫刻家が作った家族造形の観賞（家族システムの理解）し、家族役から発せられた声をに耳を傾け、さらに浮かんだ展開を試してみてください。それぞれの現場に合わせた展開や工夫ができると思います。

ただし、どのような造形作品、展開であっても、限られた空間（会場）の中での再現であるということは肝に銘じておきたいと思います。

宣伝です

短信でも触れましたが、月刊の「ケアマネジャー」（中央法規出版）2013 年 2 月号から、～Steep で Deep な援助学～「家族造形法を使った事例検討会」を連載（数回の予定）しています。

興味のある方は、是非、購読ください！！

家族造形法の深度

最終回

早樫 一男

And 興津真理子・堀江幸代・西野真理

お知らせ

前回も紹介しましたが、月刊の「ケアマネジャー」（中央法規出版　2013 年 2 月号から 5 月号）に「家族造形法を使った事例検討会」が連載されました。ぜひ、一読ください！

今回は…

今春、同志社大学心理学部を卒業した堀江さんと西野さんが卒業論文でまとめた「家族造形法を用いた事例検討会の効果に関する検討」の要約を紹介します。

早樫は、「事例検討会に家族造形法を用いることにより、クライエントへの共感が促進される。また、クライエントの家族に関する新たな気づきが得られる」と考え、家族造形法を事例検討会に導入してきました。

我が国においては、家族造形法に関する研究論文はないと思います。そこで、興津先生のゼミ生である二人が質問紙を用いて、家族造形法に関する研究にチャレンジしました。以下はその紹介（要約）です。

調査の対象は…

2012 年に早樫がファシリテートした以下の研修会の参加者が調査対象です。

①日本家族心理学会第 29 回大会ワークショップ（24 名参加　アンケート回収者 15 名）。

②平成 24 年度支援者支援研修」（立命館大学人間科学研究所主催）（36 名参加　全員回収）

③「京都家族造形研究会主催　現任者のための家族援助研修会」

①②においては、参加者の多くが家族造形法体験は始めてでしたので、次のようなプログラム内容としました。

まず、家族造形法についてのミニレクチャーと実際のケースをもとに全体の場でデモンストレーションを行いました。その後、小グループに分かれての家族造形法を参加

者全員が体験するといったものです。デモンストレーションで紹介されたケースの家族役割を各グループ内で担いました。

研修終了後の質問紙は、福富・坂下・塩田（2012）が作成したものをベースにしています。内容的には、家族造形法を用いた事例検討会からどのようなものが得られたかを評価してもらっています。

③は参加者 11 名の固定メンバーです。この研修会は約１０年間、継続して実施している定例の研修会です。参加者の殆どが家族造形法の経験も豊富です。今年、初めて参加した人は３名でした。毎回、参加者の中から提出された事例を検討しています。アンケートは８月，９月，10 月の３回実施しています。

調査結果の要約は…

質問紙の内容についての詳細は省略します（参考文献参照のこと）。

①②の参加者は、「ケースの見方」「利用者・クライエントの思いのくみ取り方」「利用者・クライエントを自分の視点とは異なった角度から見直す」といった点において、先行研究の平均値に比べ、有意差が見られました。

特に、研修会初参加の人にとっては、ケースやクライエントに対する新たな視点を得る、共感的理解が高まるなどの効果があると考えられる結果となりました。

事例検討に家族造形法を用いることによって、参加者のクライエントへの共感的理解やクライエントの家族に関する理解が深まる、事例やクライエントに関する新たな気づきが生まれ、また、多角的なケース理解が促進される、などの有効性が示唆されました。

また、「家族の変化する方向性がイメージできた」「問題や症状を持つメンバー以外の家族に焦点を当てることができた」なども高い評価が得られた。

家族造形法を使った事例検討会における診断的側面は、クライエント家族に対する理解や見立ての重層性を生み出す可能性も示唆していると考えられます。

今後は…

家族造形法を使った事例検討会については、参加者の臨床経験や家族造形法経験の違いによる比較研究なども重要になるかもしれません。

また、通常の事例検討会と家族造形法を用いた事例検討会それぞれの効果を比較することによって、さらに家族造形法を使った事例検討の特徴や課題が明らかになると思われます。

さらに、家族造形法による事例検討の効果が心理臨床場面において、どのように活かされているのかも明らかにしておくことも必要と、さらなる課題も提示しています。

感謝

卒業論文の要約を掲載するに際し、協力いただいた興津真理子さん、堀江幸代さん、西野真理さんにお礼申し上げます。

【参考文献：文中の先行研究】

福富昌城・坂下晃祥・塩田祥子（2012）

グループ・スーパーヴィジョン研修が参加者にもたらす影響－介護支援専門員に対する―連続研修の取り組みから―　花園大学社会福祉学部研究紀要

最終回にあたって：家族造形法を使った事例検討がもたらすもの

多忙な対人援助職場の中だからこそ、事例検討は重要なものです。準備の省力化ができる家族造形法は使えるツールです。

また、頭でっかちになるのではなく、身体を通して生まれてくるもの、感じるものにスポットを当ててみるということも、生きている人間を相手にしている者にとっては大切なことです。

具体的な援助を考えるキッカケやヒントが手に入る、援助メンバーのチームワークに寄与する、年齢や経験の差を乗り越えて発言できるといった強みも含んでいます。

児童、障害、高齢を始めとした相談現場や援助関連施設、学校や病院などの教育、医療関連機関など、さまざまな対人援助現場で家族造形法が活用されることを願っています。

それぞれの現場での活用例や展開があれば、ぜひ、教えてください。

「家族造形法の深度」は一区切りとします。

連載にお付き合いいただき、ありがとうございました。

次回からは、新しいタイトル・内容で連載予定です。

日本のジェノグラム

早樫　一男

連載を始めるにあたって…

対人援助現場において、家族理解は不可欠です。その際の貴重なツールとなるのが“ジェノグラム”だと考えています。

そもそも、“ジェノグラム”に出会ったのは、「ジェノグラムのはなし―家系図と家族療法―」（石川元・渋沢田鶴子訳　明治図書）でした。海外の著名な人物のジェノグラムとその解説は、大変興味深く、また刺激的な内容でした。出会ったことに感謝です！

さて、これから、連載を試みるのは、日本の家族を題材にした“ジェノグラム”であり、日本の家族の物語です。

ジェノグラムとは…

「ジェノグラムの話」によると、ジェノグラムとは、《三世代以上の人間関係を盛り込んだ家族関係図》であるとされています。

例えば、児童相談の現場においては、子どもと父母、さらにその祖父母、また、父母のきょうだいになります。対人援助現場において、三世代以上の家族関係を聴き取るのは容易ではないかもしれません。しかし、“三世代以上”ということは心がけたいものです。この点は作成上のポイントの一つだと言えます。

また、《複雑な家族模様を一目で把握できる》ものです。視覚的に理解しやすいというのが、“ジェノグラム”の長所です。

“見やすく”　“わかりやすく”作成することは、作成上の大切なポイントだと言えるでしょう。

そして、《症状や問題が家族という場でどのような関係にあり、時の流れにつれてどのようにつながっているかということを様々な面から推理することができる》のです。この点は、“ジェノグラム”を通した家

族理解につながるものであり、家族の見立て（仮説）やアセスメントができると言ってよいでしょう。

そもそも、“ジェノグラム”は「血縁の歴史」です。さらに、「伝承される心の歴史」「心理的関係の歴史」なのです。

また、治療・介入的側面として、《家族と一緒につくっている最中に、家族メンバーが自分たちを新しい視点から見直し始めることがあるので、“ジェノグラム”はジョイニングの一方法としても重要》です。私は相談面接の早い段階で、“ジェノグラム”を利用者とともに作成しています。

Aさん（59歳）の家族

Aさんは２０歳の頃にBさんと結婚。間もなく、男児が生まれたのですが、その子が３歳の頃に夫婦は離婚。男児はBさんが引き取りました（Bさんはその後再婚）。

３４歳の頃、４歳下のCさんと再婚しました。その２年後、女児が生まれました。再婚から１１年後、再び離婚となりました（女児はCさんが引き取りました。また、Cさんは離婚後、まもなく再婚。相手の男性との間に男児が生まれています）。

Aさんは、４年前に２１歳年下のDさんと再々婚。１歳になる男児がいます。

それでは、「作成の基本」を参考に、Aさんのジェノグラムを作成してみてください。

作成の基本の紹介

表記の工夫

①男女

男性は□女性は○　□や○の中に年齢、そのそばに名前を記入することもあります。故人の場合は■や●、または□や○の中に×を加えます。

②夫婦

男性（□）、女性（○）を横線（実線）でつなぎます。その際、□や○それぞれから縦線（実線）を下し、横線でつなぐとよいでしょう。

また、男性が左、女性が右を基本とします。しかし、結婚・離婚を繰り返している場合など、男性は右、女性は左といった基本通りにいかないということはよくあります。“見やすく”“わかりやすく”をモットーに工夫してみてください。なお、内縁（同居）の場合は点線でつなぎます。

離婚の場合は、夫婦をつなぐ横線に斜め二本線を加えます。その際、子どもを引き取らなかった親の近くとします。別居は斜め一本線です。

③子ども

夫婦（男女）をつなぐ横線から縦線を下し、男の子（□）や女の子（○）とつなぎます。左が年長として、右にいくほど年少となるというのが基本です。しかし、離婚や再婚を繰り返している家族（ステップファミリー）の場合、やはり、基本通りにいかないこともよくあります。

Ａさんのジェノグラムが完成できましたか？

Ａさんのジェノグラムを作成する場合、Ｂさん、Ｃさんの再婚をどのように記載したらよいかということについて、戸惑いがあるかもしれません。

私は、Ｂさん、Ｃさんの再婚については、以下のような記載の工夫をしています。参考にしてください。

改めて、“見やすく”“わかりやすく”

離婚や再婚のご家族に出会うことが多くなっています。繰り返しますが、“見やすく”、“わかりやすく”をモットーに、素早く、的確に作成できるように努力しましょう。“ジェノグラム”の作成は 経験を積み重ねることが何よりも重要なことです。

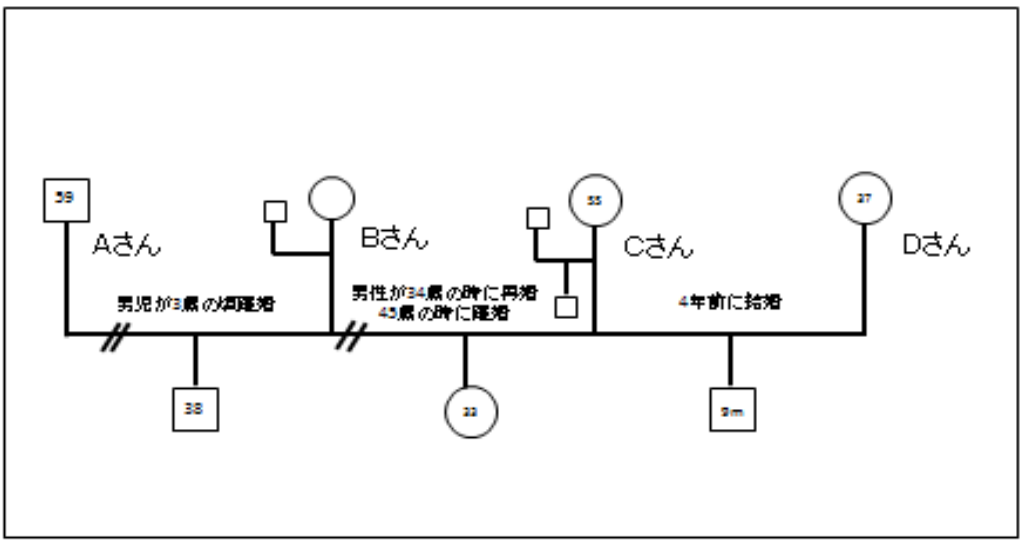
ジェノグラムから考える

Ａさんのジェノグラムは三世代以上にわたる家族情報ではありません。しかし、分かっている家族情報の範囲の中だけからも、さまざまなことが思い巡らせるのではないでしょうか？

あなたは、Ａさんのジェノグラムから、どのようなことを思い巡らせますか？

（つづく）

Ａさんのジェノグラム



日本のジェノグラム

早樫　一男

2

命名（名づけ）の話題から

家族に近づく

相談面接の場合、家族のご紹介をお願いした後、名前（命名）のことをよく話題にします。命名のいきさつ（決定）や思いを教えてもらうのです。

また、ワークショップの最初のアイスブレークとして話題にすることがあります。自己紹介をする際に、「名前（命名）」から話始めるようにという課題を出すのです。

ところで、ジェノグラムの作成の際、家族を見立てる上でも、□○の横や下に家族メンバーの名前を記入しておくことは重要なことだと考えています。

また、面接の初期に、家族メンバーの命名を話題にするというのは、《家族情報の収集と仮説（見立て）へ》つながる作業ということができます。

例えば、子どもの名前（命名）を話題にするということは、命名にまつわる「家族の決定」（家族システム）に関する情報につながります。父母だけでなく、祖父母など（拡大家族）の存在や関係性に関する情報も手に入れることができます。

具体的には、「どなたがつけられましたか？」「どのように決まったのですか？」といった質問から、「おじいちゃんやおばあちゃんはそのお名前をどのように思っておられますか？」といった質問も可能でしょう。

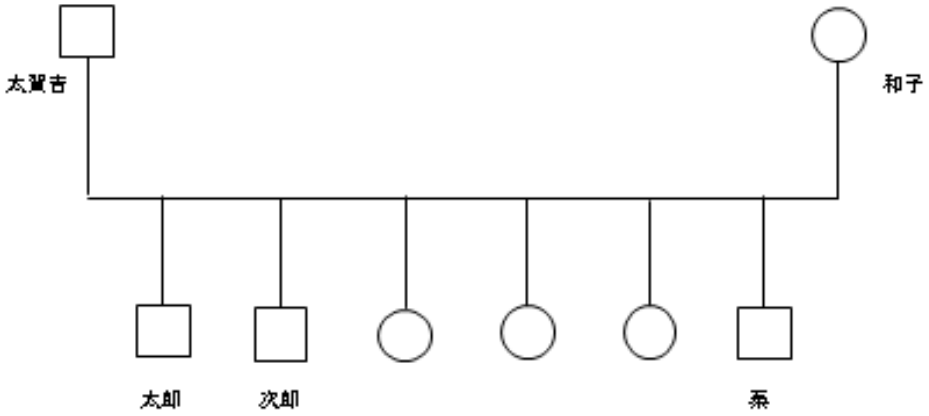
そして、会話の中で家族から話題にされたメンバーについては、引き続き、聴きこむことができるのです。「＊＊の一字をもらっています」という場合は、「＊＊」さんのことについて、確かめることも可能です。

聴き方が上手な場合、家族の歴史（結婚、誕生、転居、離婚・再婚ｅｔｃ）に関する情報へと話題が広がっていくことがあります。

名前（漢字）の意味から

「難産で生まれただけに子どもの顔を見

A家の場合



にと《歓喜》とつけました」「優しい子に育ってもらいので《優》の一字が入っています」等、名前には意味や思いが込められていることがあります。出産前後のエピソードや子どもへの期待等々、「子どもに対する思い」について、話題を広げることができます。もちろん、家族の見立てにもつながります。

また、時には、命名の話題の中に家族のドラマが隠されていることもあります。命名から、思いもかけない話題に展開することもありました。

いずれにせよ、「名前（命名：なづけ）」は家族や個人の理解の上で、さらに、相談の初期の段階で触れることができる話題としても貴重なものということができるでしょう。

日本の男性の場合

キラキラネームが流行る時代とはいえ、男性の場合、名前に漢数字がつく場合をよくみかけます。ちなみに、私は“一男”です。

「一」がつく名前（例：「一郎」）を始め、「太郎」などは「長男」「最初の男の子」ということが名前から自然に伺われることになります。それは、単に順番を表すだけではなく、暗黙に、長男役割や最初の男の子ということで、跡継ぎを期待されるということを意味する場合があります。同じように「二」や「次」がつく名前（例：「二郎」「次郎」）は次男を表しています。

日本の政治家に見られる名前

（レギュラーとイレギュラー）

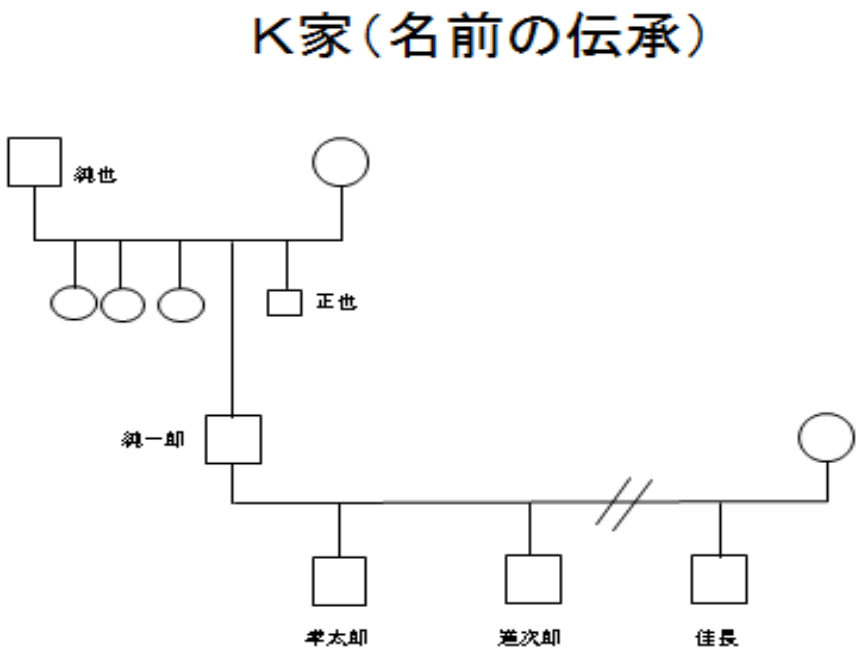
A家の場合（ジェノグラム参照）、男性は「太郎」「次郎」と続いています。三男の場合、「三」が使われることもあります。しかし、A家の場合、三男はそのパターンからはなぜか異なっています。

K家の場合（ジェノグラム参照）、「長男」「次男」という同胞位置につながる（表す）「一」「太郎・次郎」だけではなく、名前（漢字）の一字が伝承されている、少なくとも三世代にわたっているということも興味深いものです。

しかし、三男はそのパターンを受け継いでいません。彼が生まれる前に夫婦が離婚しているという背景が大きく影響したようです。

ところで、女性の場合には、このような特色が伺われる名前に出会ったことがありません。ジェンダーが名づけにも影響しているのでしょうか？

（つづく）



日本のジェノグラム

早樫　一男

3

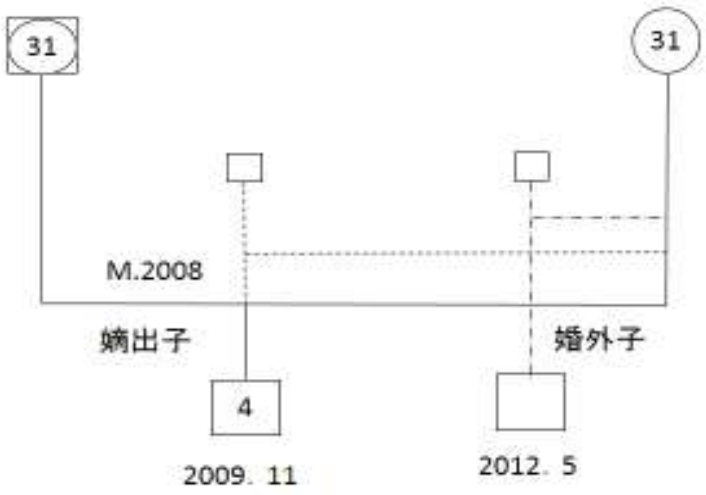
はじめに

最近話題になった出来事（新聞記事）から、ジェノグラムを作成してみました。まずは、新聞記事の抜粋を紹介します。

「性別変更男性　父と認定」（京都新聞 2013 年 12 月 12 日　朝刊より）

『性同一性障害で女性から男性に性別を変更した夫とその妻が第三者からの精子提供で人工授精してもうけた子どもを摘出子として戸籍に記載するよう求めた裁判の決定で、最高裁第３小法廷は１１日までに「血のつながりがないことが明らかでも夫の子

新聞記事からジェノグラムを作成すると



と推定できる」として、法律上の父子関係を認める初判断を示した。』

ちなみに、『03 年に成立した性同一性障害特例法により、3500 人以上が戸籍を変えている』とのことです。

ところで、『裁判で焦点になったのは、今回の事例が「妻が婚姻中に懐胎した子は夫の子と推定する」と規定した民法７７２条に該当するかどうか』であったようです。

『最高裁の判断は、女性から男性に変更した人は、夫として結婚できるだけでなく、結婚中に妻が妊娠した場合は、民法７７２条の規定で嫡出子と推定されるというべきである』とされました。

なお、『昨年５月に生まれた次男も空白とされた。今度は親子関係の確認を求めて提訴したが、今年９月の判決では認められなかった』とのことです。

さて、新聞記事よりジェノグラムを作成すれば次のようになるのではないでしょうか。

海外では…

記事では、『専門家によると、ドイツやフランスなどでは妻が人工授精で出産することに夫が同意した場合、生まれた子を実子とするよう規定している。性同一性障害の有無にかかわらず、今回のような問題になることはない』と紹介しています。

そもそも、日本の法律が現代の家族のありように対応できていないような印象も受けます。

ジェノグラム作成上の工夫

それはともかく、ジェノグラム作成の際に工夫（考慮）したのは次のような点です。

性同一性障害による性別変更は○と□を重ねました。また、精子提供者は小さな□としています。さらには、精子提供者と女性、また、男児をつなぐ線は、それぞれ、波線や実線を使ってみました。　（参考：「ＧＥＮＯＧＲＡＭＳ　２nd Edition」）

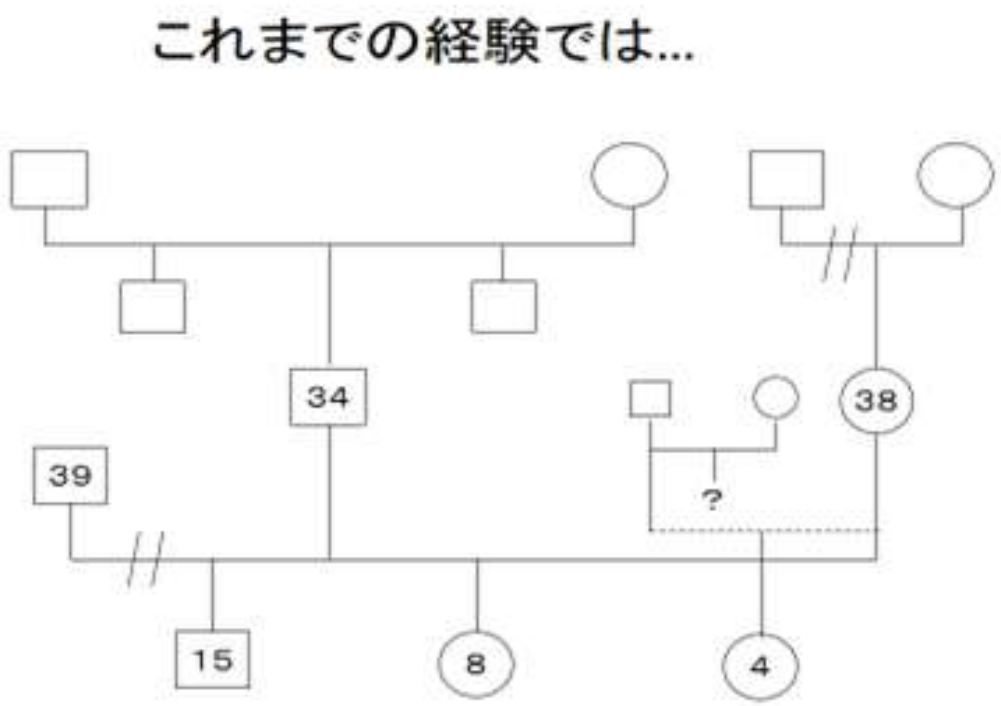
これまで経験したのは…

「婚姻中又は離婚後 300 日以内に生まれた子どもは，婚姻中の夫婦間にできた子（嫡出子）と推定され，仮に他の男性との間に生まれた子どもであっても出生届を提出すると夫婦の子どもとして戸籍に入籍となる」という規定から思い出す事例がいくつかあります。

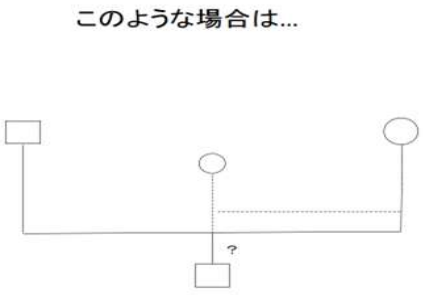
たとえば、次のような家族（ジェノグラム参照）関係です。この事例（一部再構成）は、いわゆる妻の不倫でしたが、家庭裁判所に対して、親子関係不存在確認の申し立てをしないまま（夫が事実を知らない）まま推移したものでした。

４歳の女児は３４歳の男性と３８歳の女性を夫婦（父母）とした戸籍に入っていますので、当然、戸籍上の父親は３４歳男性となります。

なお、３８歳女性は不倫関係にあった男性の子どもについては、詳しくわからないため、「？」としています。



このような場合は（まずは、ジェノグラムをご覧ください）…



ジェノグラム解説：妻は第三者からの卵子提供を受けました。夫の精子との受精卵を妻に移植、そして、妻が男児を出産した事例です。

親子関係については、入籍されているだろうということで、子どもからは実線とし、念のため「？」としています。

今回は…

最近の話題から、いくつかのケースを紹介しました。ジェノグラムを作成することを通して、現在、日本の家族が抱えている課題や家族の多様性など、さまざまな視点から考えることができるのではないかと思っています。

また、今後、さまざまな形態の家族にあわせたジェノグラムが工夫されたり、進化していくのかもしれません。

（つづく）

日本のジェノグラム

早樫　一男

4

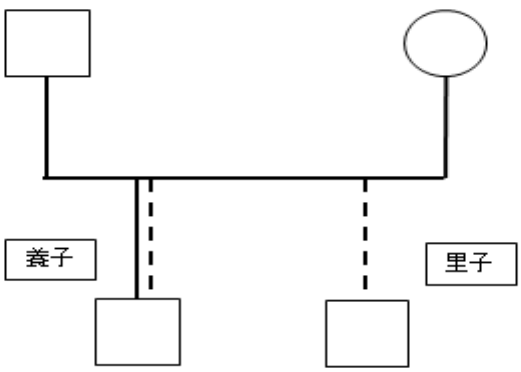
今回は…

「ジェノグラム（家系図）の臨床」（石川元監訳　ミネルヴァ書房）:【原本は「GENOGRAMS　assessment and intervention」（2nd edition)】を参考に、養子や里子の記載について紹介いたします。

なお、ここで言う「養子」というのは、婚姻による女性方への入籍（妻の姓を名乗る）ではありません。（多くの場合は）未成年の時期に養親と親子関係の縁組をすることです。

里子（里親）とのつながりを示す線は、夫婦を結ぶ横線から点線（破線）とするというのが基本です。さらに、養子（縁組）は実線と点線（破線）を並行して描きます。

養子・里子の記載

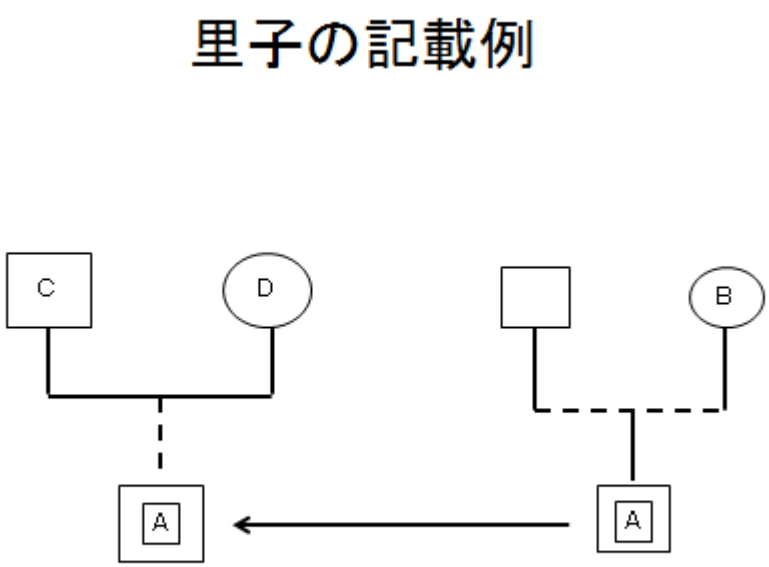


里子（里親）の記載例

以下のジェノグラムは、未婚女性（B）と内縁関係の男性との間に生まれた男児（A）を養育里親（CD）が里子として育てている場合の記載例です。

この場合の留意点は、ジェノグラム上に、実親も記載している点です。出生家族の存在や出生家族との関係を矢印で示しています。

また、養子前提であっても、ジェノグラム作成時点で戸籍に入っていなければ、「養子」として記載（注意書きとして、補足説明）すればよいと思います。



養子（養親）の記載例

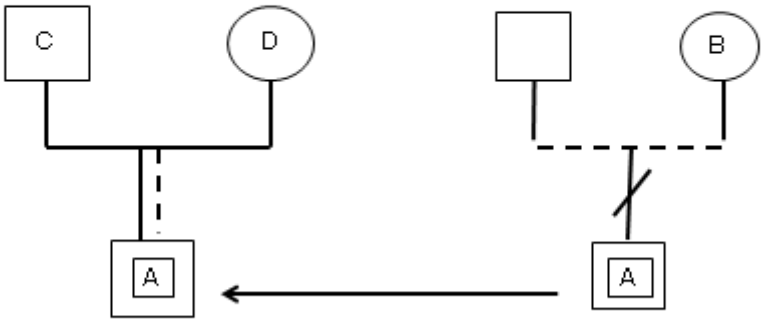
子どもを養子に出すという場合、まったく縁もゆかりもない人に託す場合と親戚といった間柄の中で、養子に出すと言う場合があります。いずれにせよ、実親や養親になんらか

の訳がある場合が多いのではないかと思います。

親戚の間では、例えば、長男夫婦に子どもがなく、弟や妹夫婦の子どもの一人を長男夫婦の養子にするといったような場合です。「家や財産の伝承」など、さまざまな背景が存在しています。時期的には、子どもの年齢は幼少期の頃もあれば、児童期以降のこともあります。親戚関係の場合は、生物学的には実親が戸籍上は「おじ」「おば」であったり、「おじ」「おば」が戸籍上は親であったりと、複雑な人間関係が生じる可能性があります。

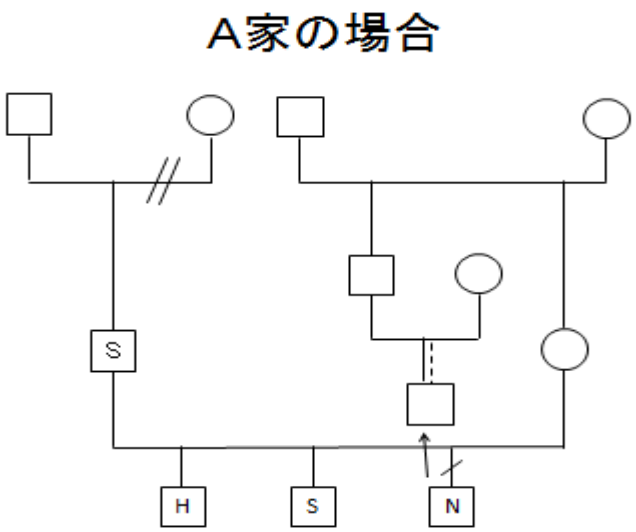
次の記載例は、未婚女性（B）と内縁関係の男性との間に生まれた男児（A）を夫婦（CD）の養子として縁組した場合です。養親と子どもを結ぶ縦線は実線と点線（破線）を並行して使っています。

養子縁組の記載例



ここでも、記載上の留意点としては、実親も記載していることです。矢印で出生家族の存在や関係を表しています。さらに、この場合は、実親から下した縦線に斜め線を一本加えることが考えられます。戸籍上のつながりは切れたという意味です。また、実親との交流状況（交流の有無など）は「注意書き」として記載することができるでしょう。

ある家族：名前の伝承、家の伝承、さらに…



Ｓ夫婦（Ａ家）には３人の男児が生まれました。長男のＮの名前には、Ｓの父親の一字とＳの妻の父親の一字が使われています。次男には、Ｓの一字と漢数字が使われています。三男はＳの父親の一字が使われていますが、幼い頃に、Ｓの妻の兄夫婦に養子となりました。

Ｓの妻の父親、兄、そして、三男には共通する一字が使われています。名前が伝承されているのがわかります。ちなみに、名前の伝承については、前々回で話題にしたところです。

以下は、Ｓ夫婦のさらに上世代の断片情報です。Ｓの妻の父親（Ｓの子ども達から見れば母方の祖父）は、中学生の頃、Ｓの妻にとっては父方祖父にあたる家の養子になっています。一方、Ｓの父親は離婚後、Ｓを引き取っています。また、Ｓの結婚前には亡くなっているとのことです。

さて、ここからは、限られた家族情報やジェノグラムをベースに思いを巡らせる作業です。

ジェノグラムから考える作業として、それぞれの家族（例　Ｓ夫婦の家族、ＳやＳの妻の出身家族など）について思いを巡らせてみることもできますし、それぞれのメンバー（例Ｓ、Ｓの妻、長男、次男、三男）に思いを巡らせることもできるでしょう。

あなたなら、どこに（どの点に）関心を抱き、思いを巡らせますか？　自由に考えてみませんか？また、どのような追加情報があれば、さらに、思いを巡らせることができますか？

ジェノグラムを眺めながら、さまざまな観点から考えてみてください。（つづく）

日本のジェノグラム

早樫　一男

5

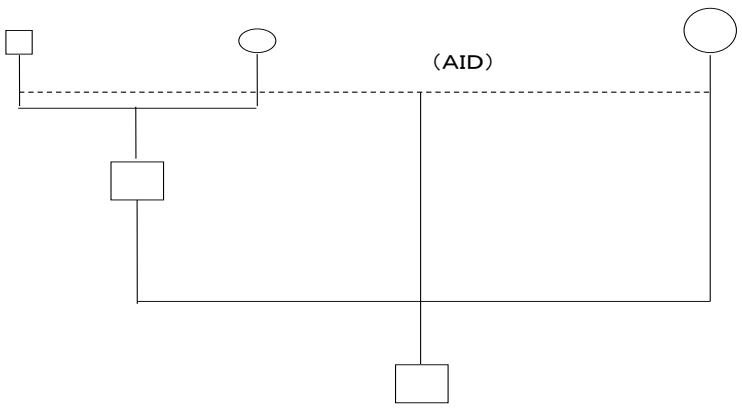
家を継ぐ…

今回は“家を継ぐ”　ことに関連した家族の話題（ジェノグラム）です。まずは、最近の話題（京都新聞　７月２８日　朝刊より抜粋）を紹介します。

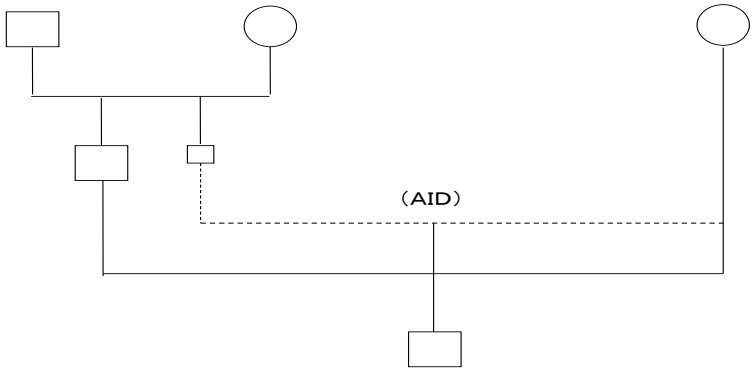
「1996 年から 2013 年に、７９組の夫婦で妻が夫の実父（妻の義父）から精子提供を受けて体外受精により計１１８人の赤ちゃんが誕生したことが分かった。（略）精子の提供の内訳は、夫の実父が１１０組、夫の兄弟が２８組、その他が８組（以下省略）」

このような事例をジェノグラムにして作成してみると次のようなもの（ジェノグラム①②）になるでしょう。

夫の父（義父）からの精子提供　体外授精の場合
（ジェノグラム　①）



夫の兄弟からの精子提供　対外授精の場合
（ジェノグラム②）



解説欄では、「精子の提供者が夫の実父だと、夫との血のつながりは担保される。その半面、子どもは遺伝上、夫の“きょうだい”になり、血縁関係が複雑になる」としている。

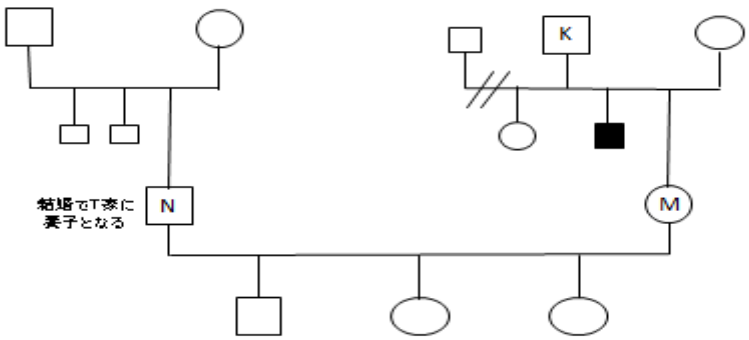
ジェノグラム①のように視覚化することによって、そのような危惧がさらに分かりやすくなっている。生殖医療技術が発展してきたからこそ生じている課題かもしれません。

従来は…

前回紹介したような、未成年の時期に（特別）養子縁組をする場合や以下に紹介するような婚姻による女性方への入籍（男性が女性の家族の養子となり妻の姓を名乗る）がよく見られるパターンです。

例えば、T家のような場合です。

T家



なお、結婚により養子となった場合は、ジェノグラム上に、「結婚により○○家の養子となる」といった記載を加えるとすればいいでしょう。

ところで、T家は地域の名士として古くから知られた一族です。さらに、KはT家の名前をさらに大きく発展飛躍させる働きをしたとのことです。

Kは初婚でしたが、離婚した子連れの女性と結婚した理由は定かではありません。何らかの事情や訳があったと思われます。その事情や背景は夫婦関係に何らかの影響を与えていたと思われます。

ところで、K夫婦には男児とM子が年子で生まれました。年齢が近い二人は仲が良かったとのことです。M子の異父姉は10歳ほど年上でしたので、M子は義理の父と実の母の双方に対して気遣いながら、さらに、親代理としての役割を果たすことになりました。とても控えめな人だったとのことです。

M子は父の愛情を一身に受けました。それは溺愛に近かったようです。T家の跡継ぎとして期待された兄はM子が4歳の頃、病気で亡くなっています。その結果、KのM子への期待はかなり強くなっていきました。また、M子も父の期待を意識するようになりました。

長男がなくなったことによる役割の変化が顕著に伺われることになったのです。M子にとっては、Kの思いを受けた“家”や“家業”の伝承は当然のことだったのかもしれません。

もちろん、結婚は“家を継ぐ”こと以外の何ものでもなかったのでしょう。選んだ相手は三男でした。M子の夫（N）は、結婚により養子となりT家を継ぐという役割を引き受けたと考えることができます。

Nはその役割を見事に引き受けてきました。そのための苦労は計り知れないものがあったかもしれません。

T家にとって、次の大きな課題はN・M夫婦の子どもが“家”や“家業”を継ぐかどうかです。その際、3人の子どもから見れば、夫婦としてのNとM、また、両親としてのNとMをどのように感じているのかが大きなポイントになるかもしれません。

“家”や“家業”を継ぐことを最優先してきた親の思いはともかく、親子間で生じるギャップやズレの解決に向けて、どのように取り組んでいくのかが、Tファミリーに与えられた試練なのかもしれません。

（つづく）

日本のジェノグラム

早樫　一男

6

名字(姓)の変更

今回はきわめて個人的な話題から始めます。私は小学校の頃、名字が変わり、現在の“早樫”の姓になりました。当然、学校では呼ばれ方は変わりました。一方で、生活は何ら変化していなかったので、名字が変わるという体験はとても不思議な感覚だったことを覚えています。離婚・再婚ケースに出会うと、「子ども達の名字はどうなっているの？」と必ず疑問に思うのは、このような体験がベースになっているからかもしれません。

ちなみに、私の名字の変更について、改めて、確認してみたいと思い、戸籍謄本を見直してみました。昭和２６年に両親は結婚し、父の戸籍に母は入籍しています（父の名字となりました)。９年後の昭和３５年に父は母の両親と養子縁組の届を出しました。戸籍では、父は母の両親と養子縁組し、母も父（夫）ともに改めて両親の戸籍に入籍となっています。小学校低学年の記憶として残っていることは８歳の頃だったということになります。

ところで、父が母の両親と養子縁組したのは次のような事情からだと聞いています。母は４人姉妹の長女でした。妹３人はそれぞれ長男と結婚し、夫の籍に入りました。その結果、明治生まれの頑固な母の父（私から見れば、母方祖父）は「早樫」の家を誰も継がなくなったということにかなり危機感を持ったのか、家を継ぐ（早樫の姓を継ぐ）ことにこだわったとのことです。そして、長女である母に「家を継ぐ」という話がまわってきた結果、私の父は長男でなかったので、母の両親と養子縁組をして、「早樫」となったのです。母にすれば、元の家に戻ったという感じでしょうか。数年後、祖父母と同居することになり、父は名実ともに「養子」となりました。

離婚・再婚による名字の変更は夫婦、子どもにさまざまな影響を与えます。あるいは、影響を受けても不思議ではありません。このようなケースを理解する場合、離婚・再婚の中に潜む喪失や別れの課題、そして、生活上の変化ということも視野に入れて考える必要があると常々考えています。

〇ジェノグラムから考える：「不思議センサー」の活性化

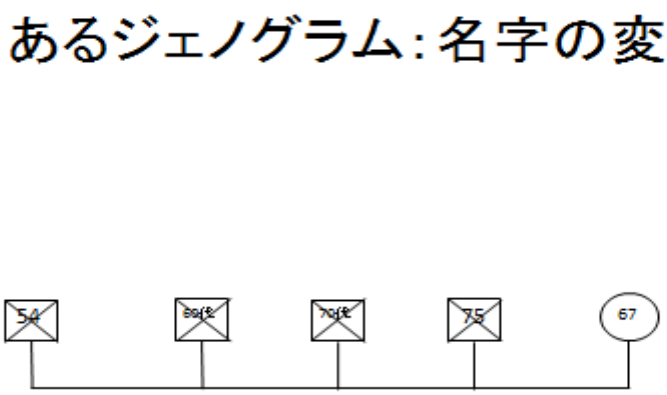
ジェノグラムからあれこれと考える際、いつも留意しているのは、「不思議やなあ」という感覚です。「不思議」というのは抽象的でわかりにくいかもしれませんが、多くの家族が体験するような（この場合、普通とかあたりまえ、あるいは平均的と表現されます）「多数派の選択」ではなく、「少数派の選択」といったことに関する感覚や感性と言ったものです。それを「不思議センサー」と呼んでいます。この「少数派の選択」の中になんらかの「事情や訳」が潜んでいるのです。

また、「訳（事情）」はストレスにもつながりやすく、援助は「訳（事情）」について理解することから（面接での展開へ）始まると言ってよいかもしれません。

さらに、具体的な日常生活場面に置き換えてみて、一般的にはどうなるかという想像をめぐらせてみることも、ジェノグラムの理解に深みをもたらせることになります。

名字の変更：あるジェノグラム

以下のようなジェノグラムの場合、あなたならどのようなことに関心を持ちますか？



私はまず、「名字（姓）はどのようになっているのか？」に強い疑問や関心を持ちます。それぞれ、結婚と同時に男性方に入籍していると仮定すれば、３度の再婚のたびに名字が変わることになります。最初の結婚前の名字も含めると、この女性の名字は五つ目になります。

結婚で名字が変わるということについて、心理的な喪失といった方があります。また、結婚によって、それまでの住み慣れた場所や人間関係から別れることも喪失になるとも…。

離婚の場合、夫婦は合意の上ですから、それなりの心の整理ができていたとしても、子ども達にとっては何らかの喪失体験であるのです。

大切な家族の死、死別という情報に触れた場合は、喪失にともなうに心の軌跡と現実的な動きにも疑問や関心を向けています。また、大切な家族の死といっても、子ども、配偶者（パートナー)、親では、それぞれ思いが異なることも容易に想像できることでしょう。

心の軌跡と言うのは、「喪の作業」と言われることであり、「グリーフワーク」（grief work）あるいは「モーニングワーク」（mourning work）のことです。

現実的な動きというのは、「法事」「納骨（遺骨の扱い)」「仏壇」「お墓」「墓参り」といった動きです。これらは、生活の中における作業であり、心の軌跡と強い関連があります。結婚による転居にも関心を向けます。地域との関係や人とのつながり（対人関係）についての特徴や課題など考えてみるのです。

ジェノグラムからあれこれと思いを巡らせるうえで、これらの現実的な動きは大変重要なことだと考えています。

もしも、面接相手なら、さまざまに思い巡らせた疑問を質問に置き換えてみることができるでしょう。

改めて…

ジェノグラムからどのようなことを思い浮かべましたか？

私の中にまず浮かんだ素朴な疑問は、「死別した複数の配偶者の仏壇や位牌はどうなっているのだろうか？」ということです。このことが思い浮かんだのは、妻の死別後再婚されたある男性の家では、仏壇に先祖や先妻の位牌が祀ってあるからです。

さらに、「法事やお墓詣りをこまめにしようとすればとても忙しいだろう？」ということです。この疑問の原点は、これまで出会った人について、そして、その人たちとの中で作り出してきた自分自身の人生について、どのように整理しているのかということに関心があるからです。

その他、さまざまな疑問が思い浮かんでいます。その中で最も大きな疑問は、この女性がこれまで最も大切にしてきたこと、最優先にしたこと（あえて言えば、価値観や人生観など）は何だろう？ということです。みなさんはどのように思いますか？

（つづく）

日本のジェノグラム

早樫　一男

7

お家騒動

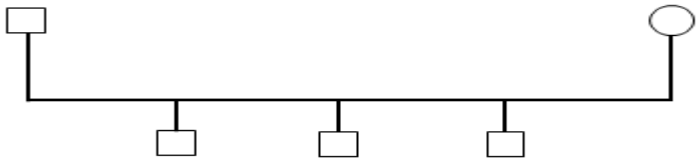
元々は、江戸時代、大名家を巡る内紛を「お家騒動」と言ったとのこと。最近では、大きな企業や著名な家族の内部構造をマスコミは「お家騒動」と呼んでいます。

その多くは、相続や後継者のなどの課題と関連しており、「パワー（決定や支配、お金など）」の伝承の課題とも言えるでしょう。ちなみに、「お家騒動」をテーマに研究している人もあるとのことですから、非常に興味深いテーマのようです。

ジェノグラムから考えると…

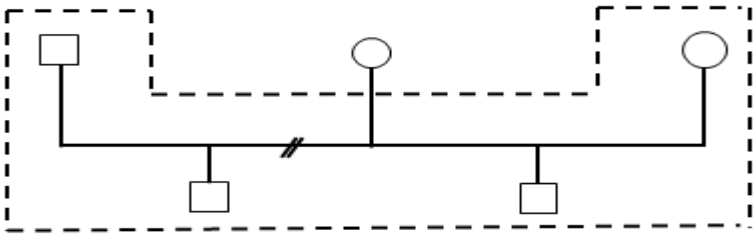
キーワードは親の子どもに対する「偏愛」です。特定の子どもに対する「親の肩入れ」と言えます。夫婦間の葛藤が背景にあることが多く、夫婦サブシステムの機能不全の影響を子どもサブシステムも受けてしまうということになってしまいます。きょうだい間での葛藤が生じてしまうのです。

お家騒動　その１



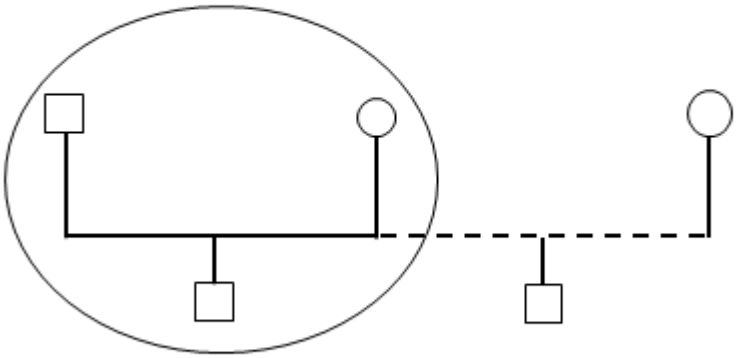
ジェノグラム（その２）は（その１）のバリエーションと言えるかもしれません。親子の間に存在する実の関係と義理の関係が複雑に絡み合っていることから、家族のドラマが展開します。

お家騒動　その２



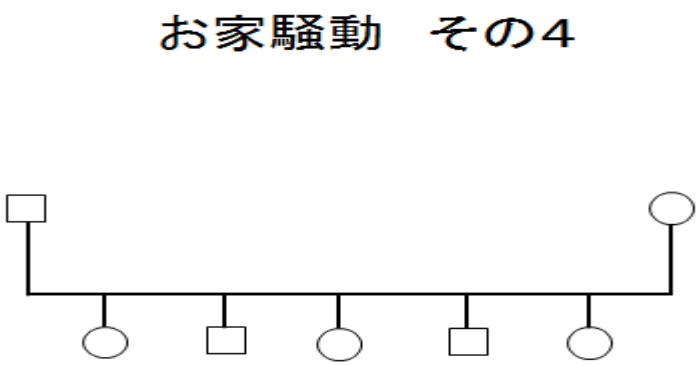
ジェノグラム（その３）はさらにバリエーションです。この場合、「認知」が大きなポイントになります。

お家騒動　その３



いずれにしても、これらの家族では、相続や後継に関する大きな課題が浮上してきても不思議ではありません。

（その４）のジェノグラムは、最近話題になっている家族（企業）です。会社運営を巡って、父親と長女が対立しています。そして、父親側には長男と母親、長女側には次男、次女、三女がついていると言われています。



この家族の対立の構造を考えた場合、「親役割」と「忠誠心」がキーワードになると思います。長女は、多忙な両親に代わって、妹弟の世話をするといった「親役割」を担ってきたのではないでしょうか。そして、妹弟から言えば、世話になった長女へ「忠誠心」が芽生えても不思議ではないと言うことです。

また、会社の幹部も「忠誠を誓う」ということに巻き込まれているのは興味深いものです。お家騒動の場合、「忠誠心」もその裏側に潜むキーワードになります。

ところで、長男にも長女にも父親の名前の一字が使われています。長男・長女に対する親からの期待が込められていたのかもしれません。また、長男・長女には、親の思いを受けた後継者としての役割意識が育まれていったのでしょう。

家族情報とジェノグラム

「あらゆる家族情報を手に入れている、知っている」というのは当事者の家族以外には起こりえないことです。だからと言って、家族のことが何も分からないというものでもないと思います。限られた情報からでも家族に怒りうる可能性を考えてみることを大切にしたいものです。

そして、家族のことを考える話題に出会えば、まずは、ジェノグラムを作成してみて、想像力を活性化させましょう！

（つづく）

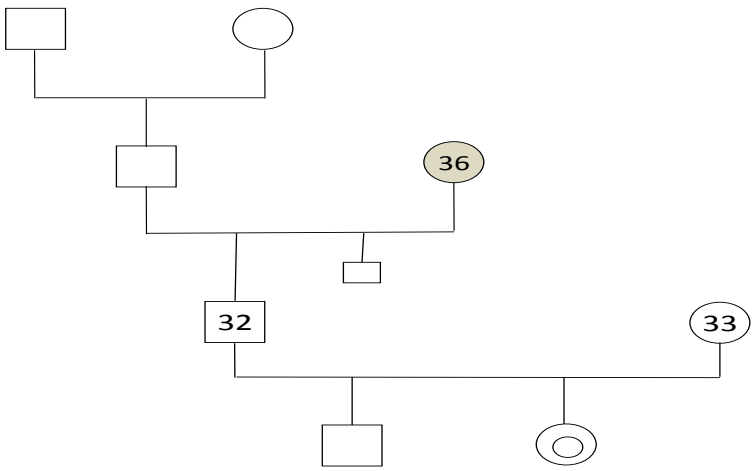
日本のジェノグラム

早樫　一男

8

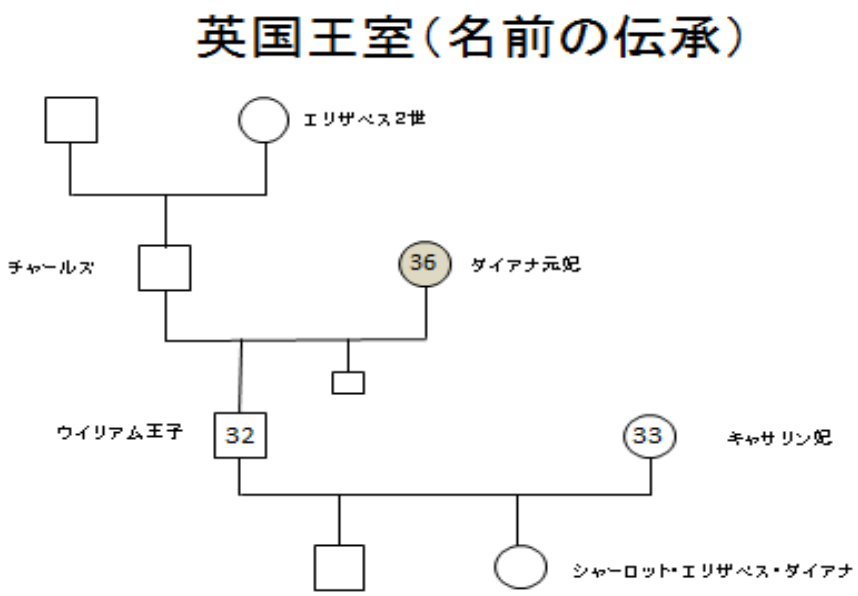
人生最初のプレゼント：名前

以下のジェノグラムは第二子の誕生と命名（名付け）に関わって、最近、話題になったご家族です。分かりますよね？



日本の場合、両親や祖父母の名前の「一字」を伝承するといったパターン、さらには、先祖代々伝わっている「一字」を使う家族があります。今回の場合は、生まれた子どもから見れば、父方祖母や曾祖母の名前がそのまま使われています。この点は日本との違いでしょうか。

いずれにせよ、名前の伝承は日本だけではないということを改めて感じた今回の話題でした。



そして、名前（日本の場合は漢字の一文字）の伝承とともに、誕生時点から家族にとっての何らかの役割を期待されることになります。子どもなりに親の思いを意識する場合もあれば、時には、その思いや期待が強すぎて、子どもがしんどくなるといったこともあるかもしれません。

〇改めて、命名の話題から

私は「一男」です。私の両親にとっては最初の子どもでした。名付けたのは父方の祖母と聞いています。祖母にとっても初孫になりました。さらに言えば、母親は私の誕生の前に流産したことがあるとか…。私の場合は、何かにつけ、「長男」という役割を担うことになってしまいました。

いずれにせよ、漢数字の「一」が名前についているだけで、「最初の男の子」「一人目の男の子」「長男」であることなどがイメージされることになります。

子どもの名前には家族のさまざまな思いが込められています。ある子は「健康に生まれたこと自体が親にとっては大きな喜び」だったという思いから、「歓喜」という名前が付けられました。「歓喜」というのは、ベートーベンの有名な交響曲第９番「歓喜の歌」で使われている漢字です。

さらに、命名のプロセスも家族によっていろいろです。それは、名前の決め方や決まり方のことです。そのエピソードを通して、家族のありようや家族の一面を垣間見ることができるのです。

ある家族の場合

彼女は事情があって、一人娘を連れて離婚しました。娘が３歳の頃でした。
その後、紆余曲折を経て、娘が小学校に入学する前に再婚することになりました。縁があった男性にも離婚歴がありましたが、その男性には子どもはいませんでした。

お互いの再婚は夫婦関係を新たに築いていくという意味で大きなハードルに向かうことになります。二人はそのことを随分意識していたので、再婚を決めるまでに、何回も話し合いを重ね、時間をかけました。

次に、意識したのは男性と子どもとの関係です。おとな同士は納得したとしても、子どもを連れた再婚の場合、新しい親との関係づくりは大きな課題になります。いわゆる、義理の関係です。

一般的に、義理の関係が生じた場合、親と子、それぞれの家族メンバーが新しい人間関係の中で、これまでとは異なったストレスを感じても不思議ではありません。

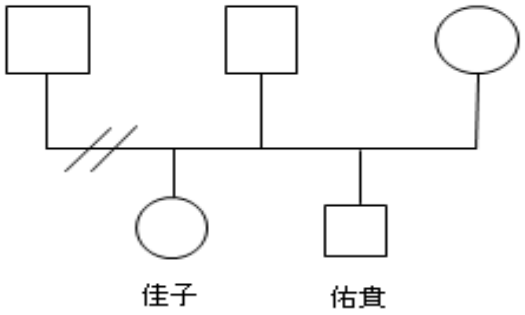
「最初から完璧にうまくいかなくても不思議ではない…」「むしろ、あたりまえ…」と思う方が、家族お互いに力まずに済み、良い関係を育てていくことにつながると思います。

二人は再婚に際して、「焦らずに、時間をかけて、ゆっくりと親子の新しい関係を築いていこう」と心に決めました。

二人の間に新しい命が芽生えたのは、再婚後、３年ほどたった頃でした。夫婦はもちろんのこと、長女も新しい家族の誕生をとても楽しみにしました。その姿を見た両親はさらに喜びました。

夫婦が時間をかけて話し合ったのは子どもの名前のことでした。生まれてくる子どもも含めた二人の子どもに対して、「分け隔てない愛情を注ぎたい」という思いと、「きょうだい仲良く育ってもらいたい」という、両親の思いをなんとか子どもの名前に反映できないかと考えたのです。

夫婦が相談した結果、生まれてくる子どもの名前は「ゆうき（佑貴)」としました。そして、「ゆうき」の「ゆう」には「にんべん」に「右」の漢字を使うことにしたのです。というのは、長女の名前には「にんべん」が使われていたからです。「にんべん」に「土二つ」の「佳」に子どもの「子」でした。



「親の思いをなんとか子どもに伝えたい」「親の思いを子どもの名前に表したい」と考えた結果、長女の名前からヒントを得たのでした。

二人の子どもに「にんべん」という共通した漢字を使うことによって、親としては、子ども達に対する思いをささやかな工夫で表したかったのです。

生まれてくる子どもにとって、名前は人生で最初の家族からのプレゼントです。また、誕生から始まって一生続く貴重なプレゼントではないかと思います。

（つづく）

日本のジェノグラム

早樫　一男

9

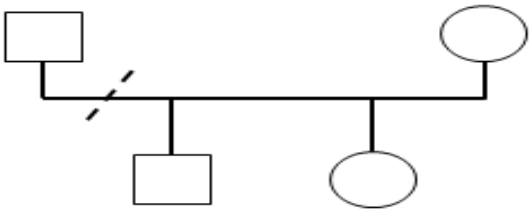
ジェノグラム記載の工夫

婚姻の形態が多様になっている現代、多様な家族の暮らしをジェノグラムとして表記する場合、忠実に反映しづらい場合があります。例えば、夫婦別姓の場合、ジェノグラム上のどこかに㊟として《夫婦別姓》などと記載することになるでしょう。

単身赴任の表記の工夫として、以下のように「夫婦をつなぐ横線に点線（破線）の斜め一本線を入れる」ことを提唱しています。ただし、共通認識として、一般に普及しているわけではありません。単身赴任は、家族にとっての歴史やその形態によって、家族関係や家族の暮らしに影響を与えることが少なくないという印象を受けています。。

単身赴任：提案

- 夫婦を結ぶ横線に点線（破線）の斜線を加える



結婚による妻方家族との同居と妻方戸籍への入籍（結婚による婿養子）

今回、紹介する婚姻による妻方戸籍への入籍（婿養子）も㊟としての記載があった方がよい例かもしれません。

そもそも、妻方の親や家族と同居の場合、同居メンバー全員を囲むことになります。同居メンバーの確認から、結婚による妻方戸籍に入籍（婿養子）という可能性が浮かびますが、やはり確認が必要です。妻の親や家族との同居イコール妻方戸籍に入籍（婿養子）と限っている訳ではありません。

何時からの同居か？その理由は？戸籍上はどうなっているのか？等など、ジェノグラム作成の早い段階で同居家族の有無や家族の歴史を丁寧に確認することによって、家族関係を理解することができるでしょう。

ちなみに私の場合は、「日本のジェノグラム　６」において紹介したところですが、核家族から母方祖父母と同居となり、名字も母方姓に変更、父は養子の立場となりました。もちろん、同居後の家族ではさまざまなドラマが展開することになりました。

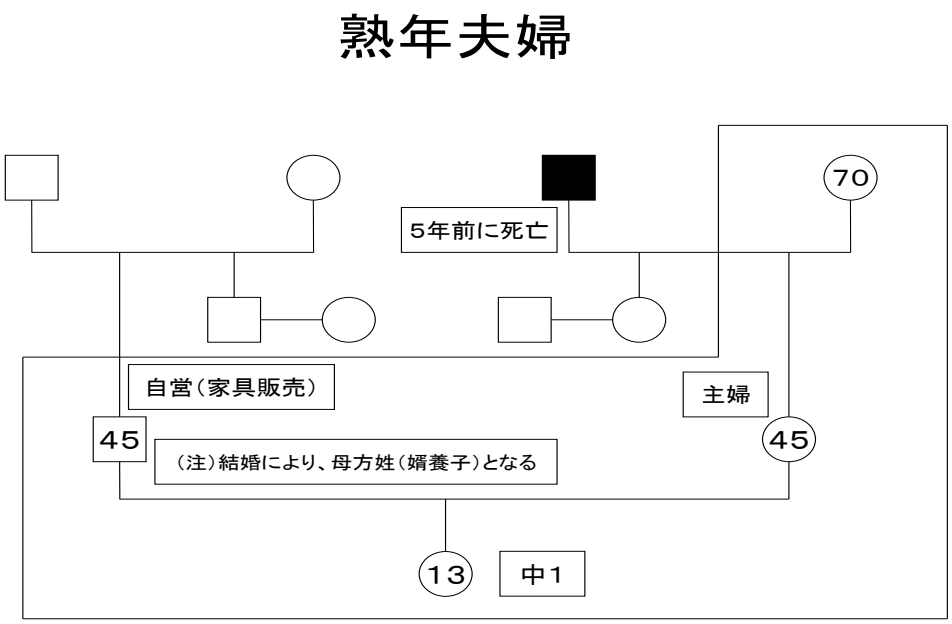
ある家族：面接場面でのジェノグラムの利用

子どものことで相談にやってきた母（妻）が、相談の途中から、「仲人に騙されました」と話し始めたのをきっかけに「夫婦」問題が語られることになりました。

初回相談面接の場において、ジェノグラムを作成しながら話を聞くことを心がけていた私は、当然、ジェノグラムを作成することになりました。

家族は夫と妻と一人娘、そして妻の母です。妻の父は数年前に亡くなっています。

母（妻）が語った内容とジェノグラムは次のようなものです。（以下、夫と妻と表現）



《夫方家族》

夫は男二人の長男で弟がいます。夫の両親は元教師で、かなり厳しい子育てであった（虐待に近い）とのことです。夫が幼いころは、夫の祖父母が子育てを任されていたようですが、その祖父母もまたかなり厳しかったとのこと。

「家族」というものに良い印象を持っていなかった夫は成長するに連れ、実家から出たいという思いを抱くようになっていきました。積極的に出たいと思うようになった頃に見合いの話が持ち込まれたのです。そして、チャンス到来という思いで、見合いの話に応じたとのことです。

夫の両親は結婚に強く反対しましたが、夫が強引に押し切りました。現在、弟夫婦が夫の両親と同居しています。

【ミニコメント】

夫には配偶者選択や結婚に至る経過の特徴、実家との情緒的遮断が伺われます。

《妻方家族》

一方、妻は姉との二人姉妹。姉は思春期の頃から、父親との関係が悪く、遠方の大学を選び、実家を出ていきました。そして、大学時代に知り合った男性と恋愛結婚、男性の実家近くで暮らしています。姉の結婚に対して、妻の両親、特に父親は強く反対したとのことです。

【ミニコメント】

妻の実家にも長女と父親の間に情緒的遮断が見られます。

《結婚後》

結局、大きな反抗期もなく、「素直に育った」（妻自身の言葉）妻が婿養子を迎えることになりました。もちろん、父親が経営していた自営業（家具販売）は夫が継ぐことになったのです。店は自宅と１０分ほどのところにありました。結婚後７年ほどしてから、娘が生まれました。

結婚当初、健在だった妻の父は５年前に亡くなりました。また、不況の影響を受け、家具販売もうまくいかなくなっていきました。もともと口数の少ない夫でしたが、さらに口数は減り、夫婦の会話はほとんどないという状況になりました。自宅では、店の残務整理ということで、食事場面以外、夫は書斎に引きこもっていました。夫の書斎へ妻は入れてもらえないのですが、一人娘の出入りは自由に許されていました。夫婦の寝室は別でした。

妻にとっては、この先、夫と暮らすことに積極的な展望がなく、息苦しさだけが募る日々だったのです。お弁当を持って、家を出てくれたら、「ほっとする」と強調して語りました。これからの生活を考えれば考えるほど、「離婚」の二文字が頭に強く浮かぶようにな

ったのです。娘には「離婚したら、あなたは、お父さんと暮らし！」と言っているとのことです。

【ミニコメント】

夫は男二人兄弟の兄、妻は女二人姉妹の妹です。異性の理解、兄弟姉妹の中での役割意識などの課題が伺われます。カップルとしての親密性を築いていく上で、お互いの努力が必要なのですが、お互いの理解が不十分なまま、生活を継続していたのかもしれません】

ジェノグラム作成がもたらすもの：妻の気づき

ジェノグラムを作成しながら、これまでのことを思い出した妻はふとつぶやきました。

『離婚したら、夫はどこに行くのだろうか？結婚時のいきさつや夫の実家への思いがあって、結婚後はまったく実家との行き来はない。お盆や正月も帰ったことがない。もちろん、娘を連れて行ったこともない。口数は少ない人なので、自分の気持ちを話すことは全くないが、本当はずいぶん寂しかったのかもしれませんね。』

『これまで、よくやってきてくれたのかもしれませんね』

【ミニコメント】

夫に対する妻の見方が変わった瞬間でした。

振り返ると…

その後の面接では、毎回、ジェノグラムを間に挟みながら、家族の歴史を丁寧に辿りなおす作業を続けました。数回の面接を通して、妻が夫の理解や家族全体の理解を広げ、また、妻の気づきも深まっていったのです。妻の変化が夫婦関係にもよい変化をもたらしました。家庭内別居から家庭内再婚に変化したと言えるかもしれません。

ジェノグラムを介在した面接の面白さや展開可能性を改めて感じたケースです。

つづく

日本のジェノグラム

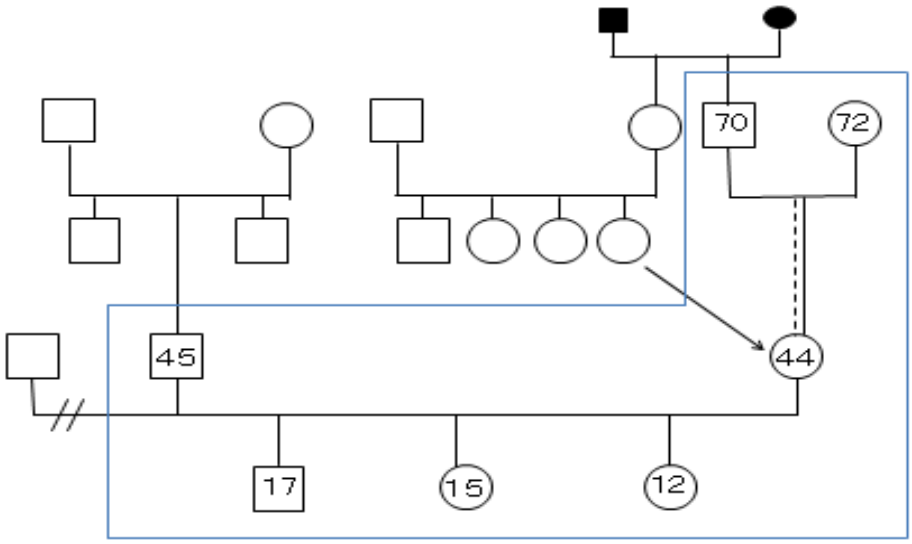
早樫　一男

10

ある家族の場合

家族は祖父母、両親、長男・長女・次女の７人家族。祖父母は「父方か母方か？」を確認したところ、「婿養子です」という答えが返ってきました。

ジェノグラムを作成すると次のようなになりました。読者のみなさんは、どのようなことが思い浮かびますか？



母親の語り

『私は３歳の頃に、私の母の弟夫婦（おじさん）の家に養子になりました。おじさん夫婦には子どもがなかったのが理由です。母方実家の跡取りとして迎え入れられたのでした。実の両親が暮らす地域の隣町におじ宅はあったので、両家の交流は頻繁にありました。大きくなるにつれ、何かあれば、３歳上の姉を頼りました』

【ミニコメント】

幼い頃、親戚の家に養子に出されるというケースがあります。この母親から見れば、「実の親だけれどおじさん・おばさん」と「おじさん・おばさんだけれど養親」という事態が生じることになります。また、「実のきょうだいであるけれどいとこ」という関係も生まれます。

このような場合、家族や親戚間の関係に関して複雑な心境となっても不思議ではありません。

実際に『養父母にはずいぶん気を遣いました』というのが母親の語りです。

母親の語り　その2

『最初の結婚はお見合いでした。２２歳の時です。婿養子に来てくれるというのが前提でしたので、養父母の薦める相手と結婚しました。

夫はとても大人しい人でした。しかし、お酒が入ると人が変わったようになりました。

私は夫と養父母との間でずいぶん気を遣い、一時期、不眠になりました。結局、養父母が言うまま、離婚することになったのです』

『その後、再婚することになりました。やはり、見合い結婚でした。離婚歴や婿養子に入るということも承知で結婚してくれた現在の夫にはとても感謝しています。長男は養父母に大変可愛がられました。例えば、小学校高学年までは、養父母の部屋で寝ていました。長女は夫がとても可愛がりました。そのような中で生まれた次女が唯一心の支えになっています』

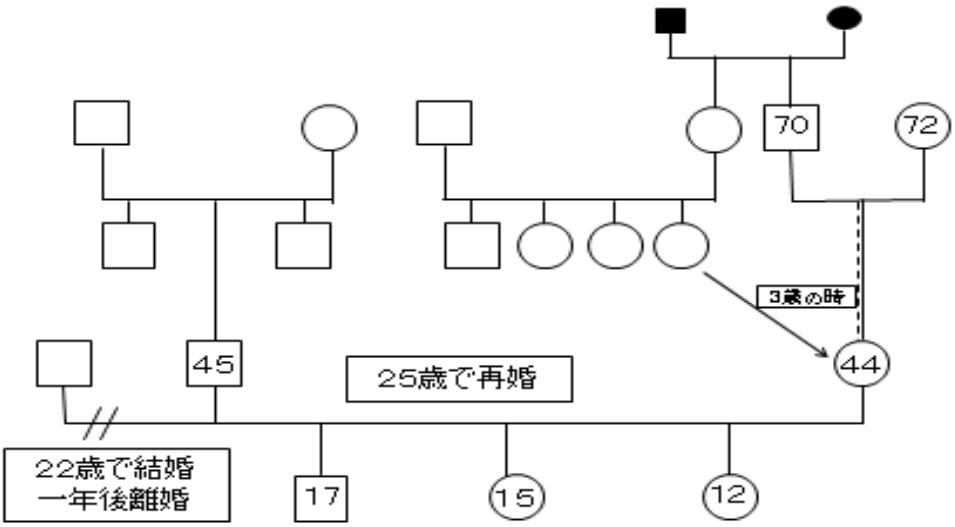
【ミニコメント】

家族の歴史を辿ることによって、母親の理解が深まりました。家族に対してでさえ、人一倍気遣いをする中で、これまで過ごしてきたようです。これまでの苦労をねぎらう言葉に続いて話されたのが、次のような内容でした。

母親の語り　その3

『次女は私の実の姉と重なるのか、いろいろなことを安心して話せるのです…。長男は養父母にとられた感じ、長女は夫にとられた思いがありました。い

つの頃からか、次女のみが私の支えになったのです。成長していく次女の姿を見ていて、うれしい反面、私の手元から離れていくかもしれないと思ったら不安でした。正直なところ、学校に行って、私の知らない世界を作っていくよりも、行かなくてもいいから、手元にいてくれる方がという気持ちが強いです…』



母親の語り　その4

母『これまで、いろいろな面で気遣いをしてきたので、私にとっては
次女だけが支えだったのです…。でも、次女は、結局、私と同じように、家族に気を使っていたのかもしれませんね。負担だったかもしれませんね』

【ミニコラム】

母親は思い出しながら、これまでの生活を語りました。その際に、役に立ったのが、母親の目の前で作成したジェノグラムです。

もちろん、ジェノグラムがなくても、母親の語りは展開したかもしれません。しかし、少なくとも、母親の語りを触発したのはジェノグラムでした。ジェノグラム上の人物を指さしながら、家族や親子関係についての話題が展開したのですから…。

改めて：家を継ぐことについて…

ところで、この家族の場合、母親は家を継ぐ役割を期待された子どもであり、配偶者選択にまで影響を与えていました。

家を継ぐ（具体的には土地や建物を始めとした財産の相続、さらにはお墓の守りなど）ために養子や養女を迎えるという家族に出会うことがあります。

そこには、家族のドラマが生まれるわけですから、家族の歴史とそれに伴う感情を丁寧に確認することによって、家族の理解が深まっていくことになります。

そのプロセスにジェノグラムが寄与することが多いのではと感じています。

（つづく）

日本のジェノグラム

早樫　一男

11

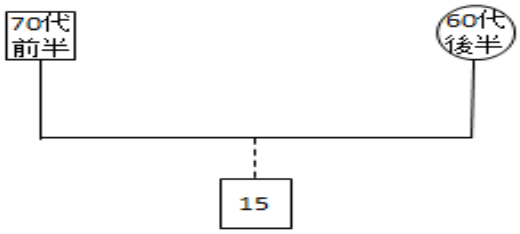
まずは、お知らせです。

４月初旬に「対人援助職のためのジェノグラム入門」が中央法規出版より発売されます。詳しくは、この原稿の最後をご覧ください。

ジェノグラムから思いを巡らせる、想像する

家族について想像する作業が家族理解の第一歩になります。年齢や家族構成といった最小限の情報からでも、まずは、家族に起こりうる可能性をあれこれ考えてみるのです。相談援助の現場にいる初心者はもちろんですが、ベテランの人にも、お奨めしていることがあります。それは、日常生活の中で、興味や関心を持った家族について、ジェノグラムを作成してみることです。相談ケースだけではなく、マスコミ報道などで出会う家族についても、限られた情報から思いを巡らせてみるのです。家族理解について、自分でできるトレーニングをぜひ工夫してください。

さて、次のジェノグラムから想像してみてください。



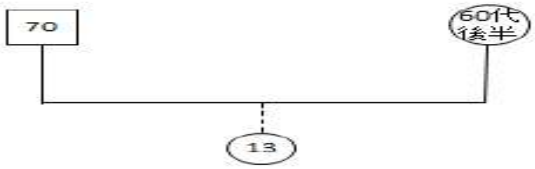
あなたは、どのような疑問や可能性を思い浮かべますか。

とてもシンプルなジェノグラムですね。このようなシンプルなジェノグラムを「スッピンのジェノグラム」と呼んでいます。

１５歳の男性は高齢夫婦（年齢は推定です）の実子ではないというのが、このジェノグラムのポイントでしょう。

家族がわかりますか？

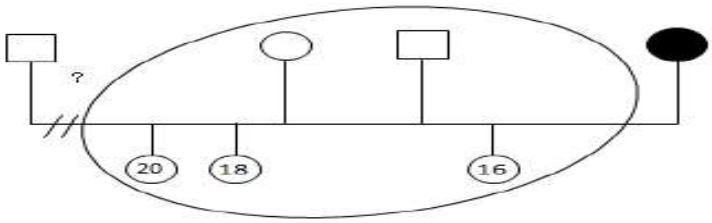
それでは、次のジェノグラムを考えてみてください。どのようなことが思い浮かびますか？



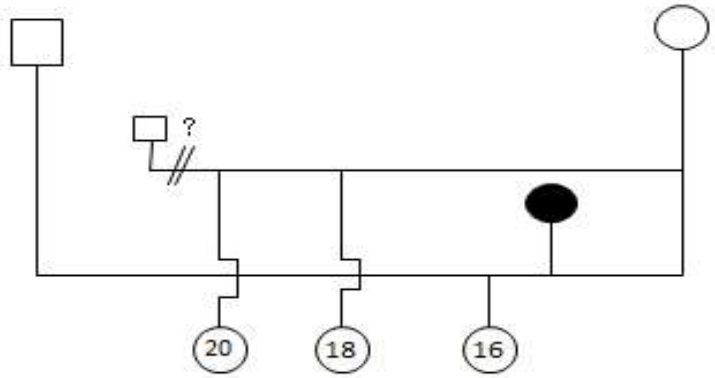
ジェノグラムから思い浮かぶ可能性や疑問など、あなたの中にある「不思議センサー」（不思議だなあとか、一般的ではないなあと感じる感覚）はどんな点で作動しますか？

先ほどと同じようなジェノグラムですね。やはり、子ども（今回は女性）は夫婦（年齢は推定です）の実施ではないというのが特徴です。

最後に、以下のジェノグラムについて考えてみてください。１６歳の女性から見れば、継母には連れ子二人（年齢的に義姉にあたります）がいるというジェノグラムです。なお、継母の夫（義姉の父親の情報は不明です）。



１６歳女性と義姉の位置関係と継母の位置を考えて作成すると、次のようなジェノグラムになります。このジェノグラムは表記の工夫ですが、わかりやすさから考えると、先に紹介したジェノグラムですかね。みなさんはどのように思いますか？



ところで、紹介した３つのジェノグラム（家族）について、わかりましたか？
答えは次号にでもお知らせします。

【対人援助職のためのジェノグラム入門】(中央法規出版)発刊のお知らせ！！

ジェノグラムに関するまとまった読み物があればという願いを込めたのが、一冊の書物になりました。「対人援助職のための家族理解入門」（団士郎著　中央法規出版）の兄弟版になればと願っています。

対人援助職は直接・間接を問わず家族と出会うことになります。具体的には、児童・障害・高齢といった福祉分野、医師・看護師・保健師などの医療保健分野、教員・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーといった教育分野、家庭裁判所調査官・弁護士などの司法分野などです。

多種多様で広範な分野にわたっている対人援助職の方々に、ぜひ、一読してもらいたいと願っています。必ず、現場で役に立つと思っています。

第一章はジェノグラムそのもの解説です。第二章は表記の基本について紹介しています。第三章は読み方、第四章はジェノグラムの扱いと事例、そして、第五章はグループカンファレンスの一端を紹介しています。

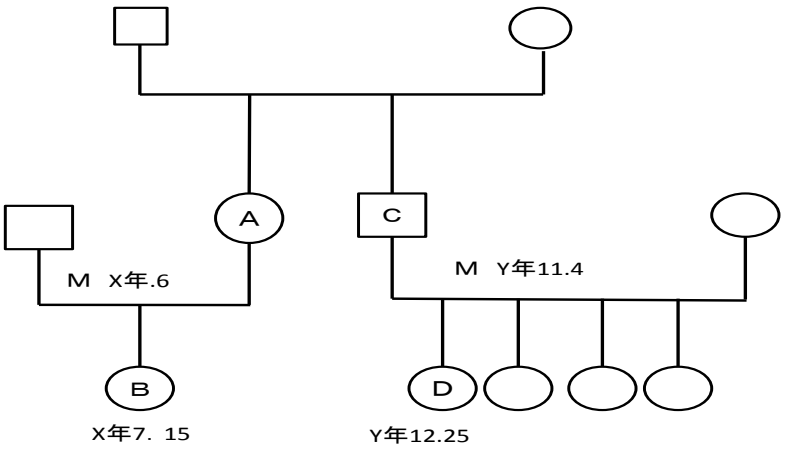
発刊は４月初旬　定価は１４００円の予定です。

日本のジェノグラム

早樫　一男

12

次のジェノグラムをご覧ください。どのようなことが浮かびますか？



ＢさんはＸ年の７月１５日に生まれています。同じ年の６月に母親（Ａさん）は結婚しています。

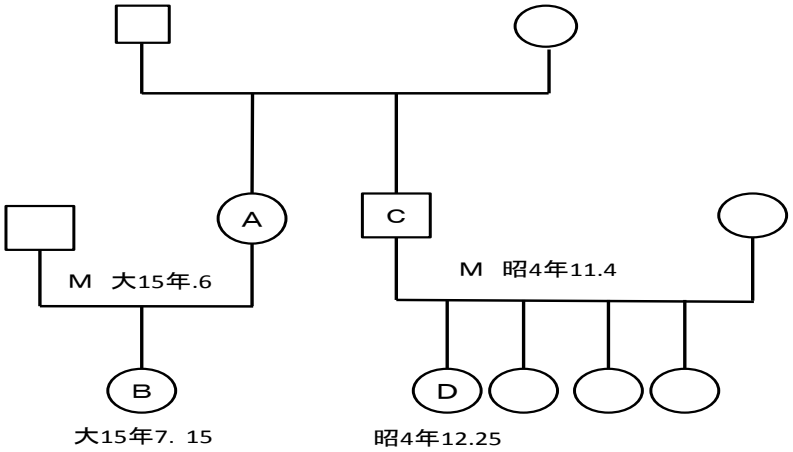
また、ＤさんはＹ年１２月２５日に生まれています。そして、父親（Ｃさん）は同じ年の１１月に結婚しています。

これらの情報から、どのようなことが浮かびますか？この二組の夫婦は「できたちゃった婚？」「おめでた婚？」ではないかと想像された方も多いのではないでしょうか？

さらに、ＡさんとＣさんの姉弟揃って、このような特徴がある家族かもしれないと思っても不思議ではありませんね。

年代の情報を追加すると…

Ｘ年やＹ年に実際の年代をあてはめたのが次のジェノグラムです。



Ｘは大正１５年（１９２６年)、Ｙは昭和４年（１９２９年）となります。そして、Ｃは私の祖父、Ｄは私の母です。

たまたま、残っていた古い戸籍などを改めて目にする機会がありました。これまで、何度か目にしていたのですが、今回、「ジェノグラム入門（後述)」を出版するにあたり、改めて、見直してみました。

古い戸籍やその他の文書等をまとめてみて、作成したのが、先程のジェノグラムです。家族関係についてはこれまで分かっていたのですが、今回、具体的な日時も付け加えたという訳です。

戸籍の記載を通して思い浮かぶこと…

私の祖父母や妻の祖父母などから、「昔は戸籍の届け出た日時はそんなに厳密ではなかった」というような趣旨のことを聞いた記憶があります。

例えば、「〇〇ちゃんは年末に生まれたけれど、忙しかったので、年が明けて、落ち着いてから届けた」というような話です。そのような話を聞いておられる方もあるかもしれません。

今回、作成したジェノグラムから考えたのは、婚姻の届けや日時の記載に関することです。例えば、祖父の場合、結婚した（結婚式をあげた）のは１１月ではなかったと思います。その証拠となるのは、祖父母の新郎新婦としての写真が残っており、裏に日付が入っていたからです。婚姻届の前に、既に夫婦としての生活は始めていたと思われます。実際

の結婚式と婚姻届のズレは、忙しかったから届けが遅れたという理由ではないのではかということを考えてみました。このズレは、当時の時代背景が関わっているのではないかということで。

女性は子どもを産むことが最優先の求められた時代であり、妊娠がわかり、出産が間近に迫った頃に、正式に籍を入れたのではないかということです。

夫婦として暮らしていても、籍を入れるのは、子どもの妊娠（出産間近）という根拠が必要だったのかもしれません。ただし、この点はまったくの推測でしかありません。

時代背景や日本の風潮や文化（価値観）を感じることになりました。

実は…

Ｂさんは生まれて間もなく亡くなっています。さらに、ＡさんはＢさんが生まれた次の日に亡くなっています。おそらく、出産前後のトラブルではなかったかと思います。２５歳ぐらいの若さでした。女性にとって、「お産」は命をかけた大きな出来事というのは、昔も今も変わりません。ちなみにＡさんの夫はその後、再婚しています。

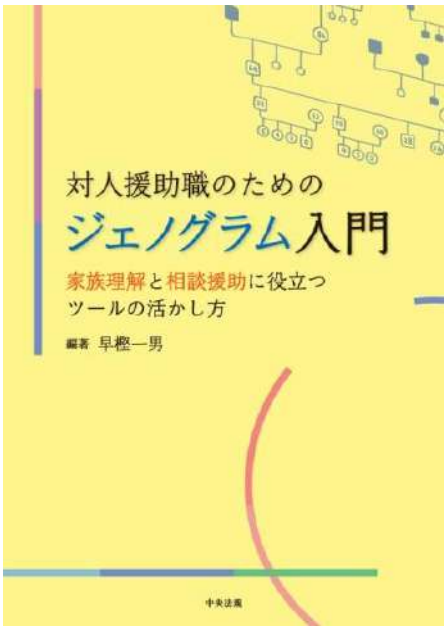
原家族をたどる…

これまでも、三～四世代遡った我が家のジェノグラムを作成しているのですが、改めて、具体的な日時なども確かめながら、思いを巡らせてみようと考えています。これまで気が付かなかった発見があるかもしれません…。

（つづく）

【対人援助職のためのジェノグラム入門】（中央法規出版）のお知らせ！！

前回も紹介しましたが、ジェノグラムに関するまとまった読み物があればという願いを込めたのが、一冊の書物になりました。「対人援助職のための家族理解入門」（団士郎著　中央法規出版）の兄弟版になればと願っています。 定価は1600円です。



日本のジェノグラム

早樫　一男

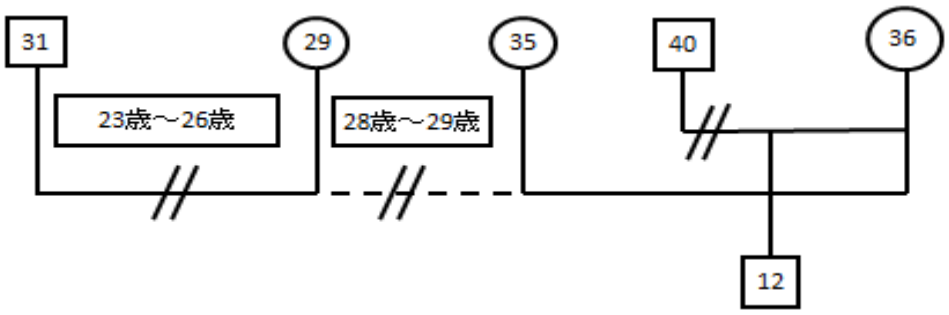
13

はじめに

最近、芸能人を始め、話題になっている「不倫」。婚姻関係にある男女が配偶者以外の異性との親密な関係を持つことを不倫関係とすると、そこには夫婦サブシステムやバウンダリーの課題が伺われます。

ジェノグラムの表記では、入籍していない場合（内縁関係）や同居の表記は以下のようになります。男女の間は点線で結びます。

以下は、31 歳の男性のジェノグラムです。23 歳の時に結婚し、３年後離婚。28 歳から約一年間、ある女性と内縁関係にありました（同居していました）。ある事情から別れた後、最近、離婚経験のある 36 歳の女性と再婚しました。男性の結婚歴（内縁も含む）を実線や点線を横に広げていくことによって、時間の流れ（歴史）が分かり、家族や個人の歴史に思いを巡らせることができます。



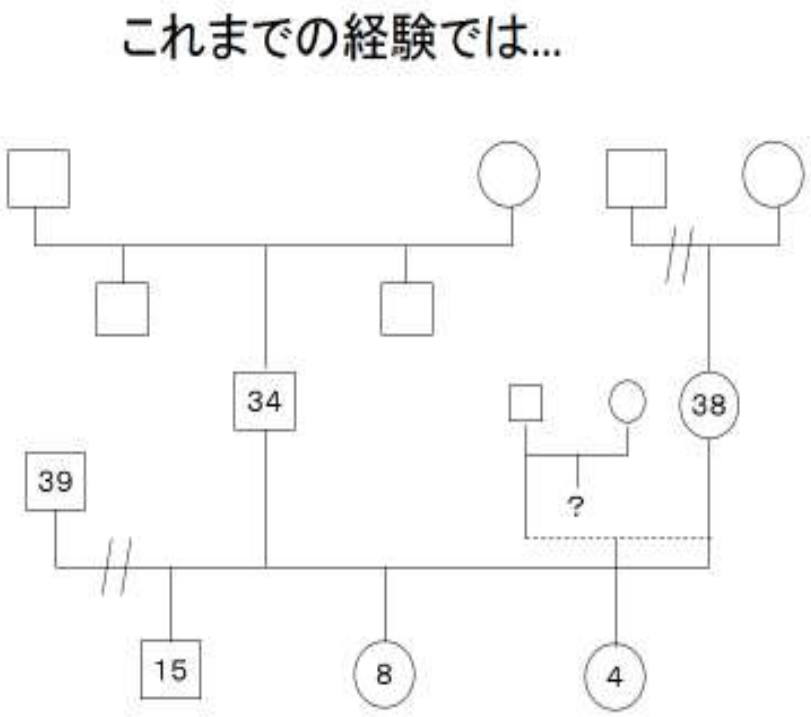
不倫関係の表記は？

ところで、婚姻関係と平行して、配偶者以外の異性との関係がある場合の表記をどのようにしますか？

あれこれ考えていると、以前、紹介したジェノグラム（「日本のジェノグラム　３　これまで経験したのは」より）が思い浮かびましたので、改めて、紹介します。

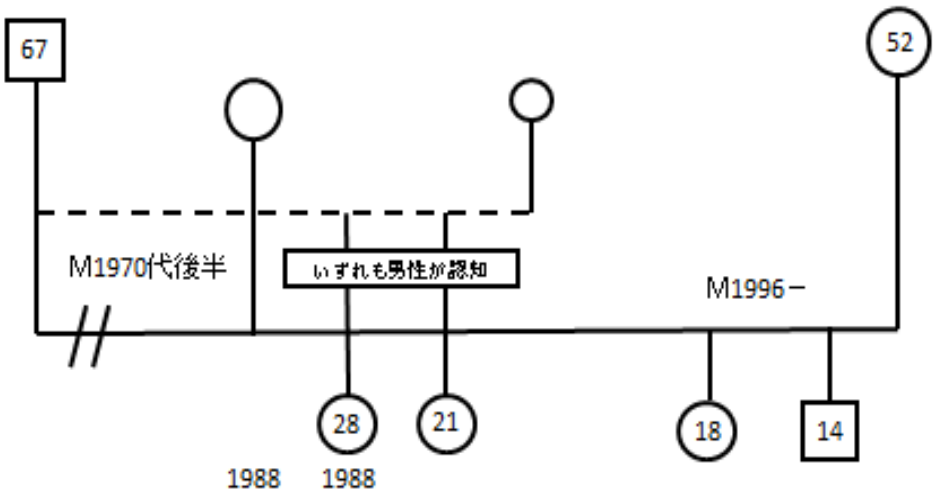
『これまでの経験では…』として紹介した以下の事例は妻の不倫でした。４歳の女児の生物学的な父親は３８歳の女性が付き合っていた男性（年齢不詳）ですが、３４歳の男性と３８歳の女性は婚姻中ですので、現在の民法では戸籍上の父親は３４歳男性となります。

なお、３８歳女性は不倫関係にあった男性の家族関係については、詳しくわからないため、「？」としています。



上記のジェノグラムを妻の不倫の表記の一例とすれば、以下のジェノグラムは男性の不倫の表記の一例です。

男性の不倫：認知の有無を表記



なお、男性の不倫の場合、相手との間に生まれた子どもを認知しているなら、ジェノグラム上のどこかに表記しておきましょう。

婚姻中の夫の不倫、妻の不倫の基本形としては、夫婦つなぐ線の上に、点線で不倫関係（相手の家族状況）を描くこととしました。

ひとこと…

さまざまな話題から家族関係に関心を持つことができます。今回は「不倫関係」を話題にしました。

ジェノグラムを作成することを通して、日本の家族が抱えている課題や家族の多様性など、さまざまな視点から考えることができるのではないかと改めて強く感じています。

今後もさまざまな家族の形態にあわせたジェノグラムの表記について、取り組み、家族理解を深めていきたいと考えています。

「日本のジェノグラム」としての連載は今回で一区切りとします。読者のみなさまに感謝申し上げます、

今後は不定期な掲載を考えています。引き続きよろしくお願いします。